

桑原高井遺跡3次調査
東本遺跡8次調査
東野お茶屋台遺跡8次調査

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2010

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

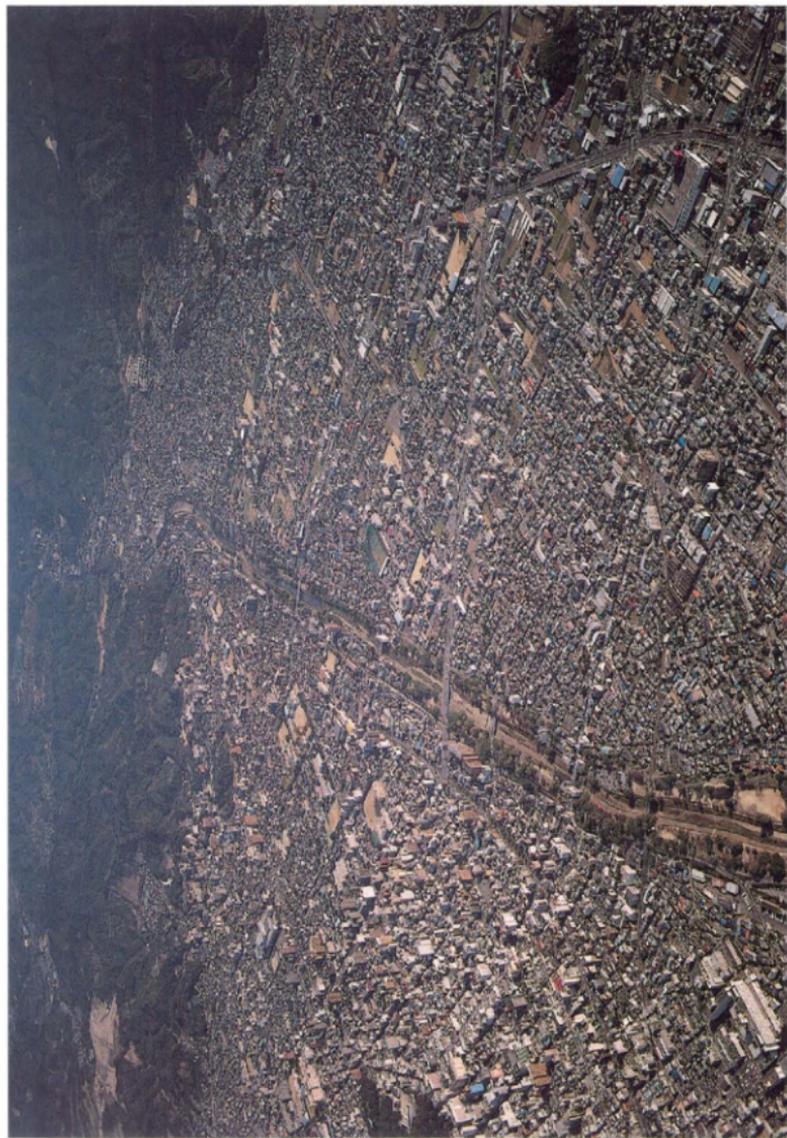
くわ ばら たか い
桑原高井遺跡3次調査
つか もと
東本遺跡8次調査
ひがし の ちや や だい
東野お茶屋台遺跡8次調査

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書



2010

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



巻頭図版1 調査地周辺の上空写真(西より)

序

本書は、個人住宅の建築に伴う本発掘調査として国の補助を受けて実施した桑原高井遺跡3次調査、東本遺跡8次調査、東野お茶屋台遺跡8次調査の報告書です。

これらの遺跡が分布する桑原・東本地区では、近年の宅地開発等に伴う発掘調査により、平地部には弥生時代から中世までの集落跡が発見され、丘陵部では古墳時代中期から後期にかけての古墳が分布することが明らかになってきました。

桑原高井遺跡3次調査と東本遺跡8次調査では、竪穴住居をはじめとする弥生時代の集落跡が確認されました。なかでも桑原高井遺跡においては、出入口であったと考えられる拡張部のある竪穴住居が発見されております。また、東野お茶屋台遺跡では円墳の周溝が確認されました。これらの調査成果は、桑原・東本地区における弥生時代および古墳時代の土地利用を解明するうえで重要な資料となるものです。

本書が松山市内の歴史を研究するための一助となり、文化財保護、生涯教育の向上に寄与できますことを願ってやみません。

最後に、発掘調査及び報告書刊行にご協力くださった地権者ならびに周辺にお住まいの方々、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成22年1月31日

松山市教育長 山内 泰

例 言

1. 本書は松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが国庫補助事業として平成13年度と18年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。なお、本書は平成21年度の国庫補助事業として刊行したものである。
2. 本文中では、遺構名を略号化した（竖穴住居：S B、掘立柱建物：掘立、溝：S D、土坑：S K、柱穴：S P）。
3. 本書で使用した標高数値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
4. 基本層位や遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」（1998）に準拠した。
5. 屋外調査での写真は調査担当者で大西朋子が撮影し、遺物写真と図版作成は大西が担当した。
6. 遺構の実測は調査担当者が行い、遺物の復元及び実測・製図は調査担当者の指示のもと、石丸由利子、木西嘉子、西本三枝、萩野ちよみ、平岡直美、福岡志保美、松下郁子、森田利恵、山下満佐子、矢鋪妙子、渡部英子、渡辺佐代枝が行った。
7. 挿図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
8. 屋外調査における国土座標測量は、以下の2社に業務を委託した（株式会社アイシン調査設計、南海測量株式会社）。
9. 本書の執筆は調査担当者が分担し、編集は宮内慎一が担当し、山下、平岡の協力を得た。浄書は宮内の指示のもと平岡が担当した。
10. 本書に掲載した遺物や記録類は、松山市立埋蔵文化財センターにて保管されている。

本文目次

第1章 はじめに	[宮内]	1
1. 調査に至る経緯	2. 調査の経緯	3. 刊行組織
4. 遺跡の立地と歴史的環境		
第2章 桑原高井遺跡3次調査	[宮内]	9
1. 調査の経緯		
(1) 調査に至る経緯	(2) 調査の経緯	(3) 調査組織
2. 層位		
(1) 基本層位	(2) 検出遺構・遺物	
3. 遺構と遺物		
(1) 竪穴住居	(2) 掘立柱建物	(3) 溝 (4) 土坑
(5) 柱穴	(6) 包含層出土遺物	(7) 地点不明出土遺物
4. まとめ		
第3章 東本遺跡8次調査	[宮内]	41
1. 調査の経緯		
(1) 調査に至る経緯	(2) 調査の経緯	(3) 調査組織
2. 層位		
(1) 基本層位	(2) 検出遺構・遺物	
3. 遺構と遺物		
(1) 竪穴住居	(2) 溝	(3) 土坑 (4) 柱穴
(5) 包含層出土遺物		
4. まとめ		
第4章 東野お茶屋台遺跡8次調査	[相原]	61
1. 調査の経緯		
(1) 調査に至る経緯	(2) 調査の経緯	(3) 調査組織
2. 層位		
(1) 基本層位	(2) 検出遺構・遺物	
3. 遺構と遺物		
(1) 古墳	(2) 包含層・地点不明出土遺物	
4. まとめ		
第5章 調査の成果と課題	[宮内]	72

挿 図 目 次

第1章	はじめに	
第1図	松山平野の地形概要図(縮尺1/200,000)	3
第2図	周辺主要遺跡分布図(縮尺1/25,000)	5
第3図	東野お茶屋台遺跡分布図(縮尺1/2,500)	6
第2章	桑原高井遺跡3次調査	
第4図	調査地位置図(縮尺1/1,500)	12
第5図	調査地測量図(縮尺1/200)	13
第6図	調査地東壁・北壁土層図(縮尺1/30)	15
第7図	遺構配置図(1)(縮尺1/80)	18
第8図	遺構配置図(2)(縮尺1/80)	19
第9図	S B 001測量図(縮尺1/50)	21
第10図	S B 001遺物測量図(縮尺1/50)	
第11図	S B 001出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	23
第12図	S B 001出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)	24
第13図	掘立001測量図・出土遺物実測図(縮尺1/60・1/4)	25
第14図	掘立101・102測量図(縮尺1/60)	26
第15図	S D 001測量図・出土遺物実測図(縮尺1/50・1/4)	27
第16図	S D 002測量図・出土遺物実測図(縮尺1/50・1/4)	29
第17図	S D 003・004測量図・出土遺物実測図(縮尺1/50・1/4)	30
第18図	S K 001・002・101測量図(縮尺1/40)	31
第19図	柱穴・包含層・地点不明出土遺物実測図(縮尺1/4・1/3・1/2)	33
第3章	東本遺跡8次調査	
第20図	調査地測量図(縮尺1/500)	44
第21図	遺構配置図(縮尺1/80)	46
第22図	北壁・東壁土層図(縮尺1/30)	47
第23図	南壁・西壁土層図(縮尺1/30)	49
第24図	S B 1測量図(縮尺1/40)	51
第25図	S B 1出土遺物実測図(縮尺1/4)	52
第26図	S D 1断面図(縮尺1/40)	53
第27図	S D 2断面図・出土遺物実測図(縮尺1/40・1/4)	
第28図	S D 3断面図(縮尺1/40)	54
第29図	S K 1測量図・出土遺物実測図(縮尺1/30・1/4)	55
第30図	S P 1～8測量図(縮尺1/30)	
第31図	包含層出土遺物実測図(縮尺1/4)	56
第4章	東野お茶屋台遺跡8次調査	
第32図	調査地位置図(縮尺1/300)	64

第33図	遺構配置図(縮尺1/100)	65
第34図	土層図(縮尺1/50)	66
第35図	31号墳測量図・出土遺物実測図(縮尺1/80・1/3)	68
第36図	32号墳測量図(縮尺1/80)	69
第37図	第Ⅲ層・地点不明出土遺物実測図(縮尺1/3)	70

表 目 次

第1章 はじめに		
表1	調査地一覧	1
表2	東野お茶屋台古墳一覧	7
第2章 桑原高井遺跡3次調査		
表3	検出遺構一覧	17
表4	柱穴一覧	32
表5	竪穴住居一覧	35
表6	掘立柱建物一覧	
表7	溝一覧	
表8	土坑一覧	
表9	柱穴一覧	
表10	S B 001出土遺物観察表(土製品)	38
表11	掘立001出土遺物観察表(土製品)	39
表12	S D 出土遺物観察表(土製品)	
表13	柱穴出土遺物観察表(土製品)	40
表14	包含層出土遺物観察表(土製品)	
表15	包含層出土遺物観察表(鉄製品)	
表16	地点不明出土遺物観察表(土製品)	
第3章 東本遺跡8次調査		
表17	竪穴住居一覧	58
表18	溝一覧	
表19	土坑一覧	
表20	柱穴一覧	
表21	S B 1 出土遺物観察表(土製品)	59
表22	S D 2 出土遺物観察表(土製品)	
表23	S K 1 出土遺物観察表(土製品)	
表24	包含層出土遺物観察表(土製品)	
第4章 東野お茶屋台遺跡8次調査		
表25	古墳(周溝)一覧	71
表26	31号墳出土遺物観察表(土製品)	

表 27	第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）	71
表 28	地点不明出土遺物観察表（土製品）	

写真図版目次

巻頭図版1 調査地周辺の上空写真（西より）

第2章 桑原高井遺跡3次調査

図版1	1. 調査地全景（東より）	2. 表土掘削状況（東より）
図版2	1. 北壁土層（南より）	2. 遺構検出状況（西より）
図版3	1. 完掘状況（西より）	
図版4	1. S B001検出状況（東より）	2. S B001張出部検出状況（東より）
図版5	1. S B001遺物出土状況（南より）	2. S B001完掘状況（南東より）
図版6	1. S D001断面（南西より）	2. S D001・002完掘状況（南西より）
図版7	1. S K001完掘状況（南西より）	2. S K002完掘状況（南西より）
図版8	1. 作業風景（東より）	2. 見学会風景（北より）
図版9	1. S B001出土遺物(1)	
図版10	1. 出土遺物（S B001(2)、掘立001、柱穴、包含層）	

第3章 東本遺跡8次調査

図版11	1. 調査地全景（西より）	2. 東壁土層（西より）
図版12	1. 遺構検出状況(1)（南より）	2. 遺構検出状況(2)（南より）
図版13	1. 完掘状況（東より）	2. S B1検出状況（北東より）
図版14	1. S D1検出状況（南より）	2. S D2・3検出状況（南より）
図版15	1. 出土遺物（S B1、包含層）	

第4章 東野お茶屋台遺跡8次調査

図版16	1. 調査地現況（南より）	2. 検出状況（北西より）
図版17	1. 31号墳西壁土層（南東より）	2. 31号墳ベルト断面（北西より）
図版18	1. 31号墳完掘状況（南より）	2. 32号墳南壁土層（東より）
図版19	1. 完掘状況（北西より）	2. 出土遺物(31号墳、第Ⅲ層、地点不明)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

今回報告する桑原高井遺跡3次調査、東本遺跡8次調査、東野お茶屋台遺跡8次調査は、個人住宅建設に伴い実施した埋蔵文化財の発掘調査である。発掘調査は確認申請後、試掘調査を経て本格調査を行った。なお、桑原高井遺跡3次調査は松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の〔No.157桑原遺物包含地〕、東本遺跡8次調査は〔No.83枝松遺物包含地〕内に所在し、東野お茶屋台遺跡8次調査は〔No.79お茶屋台古墳群〕に隣接している。

〔No.157桑原遺物包含地〕内には桑原高井遺跡（1・2次調査）や桑原稲葉遺跡などがあり、弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居や土坑が確認されている。〔No.83枝松遺物包含地〕内では、東本遺跡（1～11次調査）や枝松遺跡（1～5次調査）などがあり、特に東本遺跡4次調査からはAT火山灰やアカホヤ火山灰の堆積が確認されている。また、〔No.79お茶屋台古墳群〕内では東野お茶屋台遺跡（1～7次調査）があり、30数基に及ぶ古墳や周溝が検出されている。

発掘調査は、松山市教育委員会（以下、市教委）及び、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が主体となり、平成13年度と18年度に実施した。なお、開発行為が個人住宅建設によるものであり、審査の結果、発掘調査は国からの補助金を受けて実施した。また、報告書の刊行にあたり市教委と埋文センターは委託契約を結び、埋文センターが主体となり国庫補助事業として整理・報告書作成作業を実施した。

2. 調査の経緯

調査：桑原高井遺跡3次調査は市教委が主体となり、平成13年7月から10月までの間に実施され、主に弥生時代後期の竪穴住居や溝のほか、中世の掘立柱建物などを検出した。東本遺跡8次調査は埋文センターが主体となり平成18年10月に実施され、弥生時代後期の竪穴住居や溝のほか、AT火山灰を検出した。また、東野お茶屋台遺跡8次調査は埋文センターが主体となり、平成19年2月に実施され、古墳の周溝を検出した。なお、各遺跡の場所や調査面積、調査期間等は表1に記す。

整理：各調査では、屋外調査終了後に測量図や記録写真の整理、及び出土遺物の洗浄や注記、接合作業を行った。本格的な整理作業は埋文センターにて平成19・20年度に行い、遺構図面の作成や出土遺物の実測等を進め、平成21年度には版下や原稿執筆などの報告書作成作業を行った。なお、報告書の印刷や郵送については、市教委が業務を担当した。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間
桑原高井遺跡(3次)	桑原1丁目779番2	241.04	2001年7月12日～同年10月5日
東本遺跡(8次)	東本1丁目116番6	176.05	2006年10月2日～同年10月31日
東野お茶屋台遺跡(8次)	東野5丁目甲911-9の一部	約38.00	2007年2月15日～同年2月22日

3. 刊行組織（平成22年1月31日現在）

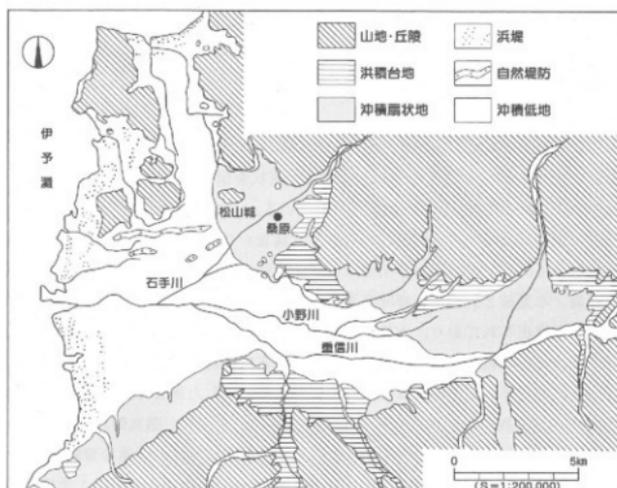
松山市教育委員会	教育長	山内 泰
事務局	局長	藤田 仁
	企画官	古鎌 靖
	企画官	青木 茂
	企画官	佐々木乾二
文化財課	課長	家久 則雄
	主幹	森 正経
	副主幹	三好 博文
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村 時広
事務局長兼松山市考古館長		松澤 史夫
埋蔵文化財センター	所長兼総務課長	白石 修一
	次長	折手 均
	次長	重松 佳久
	調査担当リーダー	栗田 茂敏
	教育普及担当リーダー	梅木 謙一
	調査担当	小笠原 彰（文化財課・退職）
		宮内 慎一
		相原 秀仁
		大西 朋子（写真担当）

4. 遺跡の立地と歴史的環境

（1）遺跡の立地（第1図）

今回報告の三遺跡が所在する松山市桑原・東本・東野は、松山城の南東部に位置する。松山市のある道後平野（松山平野）は愛媛県内最大の沖積平野であり、平野中央部には一級河川の重信川が、その支流である石手川や小野川などと合流しながら西方へ流れている。三遺跡がある桑原・東本地区は、平野内でも有数の遺跡地帯として知られており、地区の大部分が石手川によって形成された扇状地上に位置し、わずかに地区東側の一部が丘陵や低位段丘上にあたる。

桑原高井遺跡3次調査地と東本遺跡8次調査地は、石手川扇状地の扇中央付近に位置し、海拔標高35mを測る。一方、東野お茶屋台遺跡8次調査地は地区東側に広がる丘陵上にあり、海拔標高58mを測る。



第1図 松山平野の地形概要図

(2) 歴史的環境 (第2図)

三遺跡が所在する桑原・東本地区は古代温泉郡にあたることされ、とりわけ桑原郷に比定される地域に所在する。また、東野お茶屋台遺跡8次調査地がある丘陵部には、東野お茶屋台遺跡として7度の発掘調査が実施され、30基に及ぶ古墳が確認されている。

近年、調査地周辺地域では松山市による道路建設工事や民間の宅地開発等に伴い数多くの遺跡が発見され、貴重な調査成果が報告されている。ここでは、桑原地区を中心に、主な遺跡の概略を時代別に説明する。

旧石器～縄文時代

旧石器時代の遺構は確認されておらず、表面採集資料や後世の遺構に混在した状態での検出である。経石山古墳出土の楔形石器やスクレーパー、桑原西稲葉遺跡2次調査出土の角錐状石器などは、希少な考古資料である。このほか、近年の調査において広域テフラの確認事例が増加している。特に、松山東部環状線道路建設工事に伴い実施した東本遺跡4次調査では、始良Tn火山灰(A-T火山灰)が層位的に確認されており、当時の自然環境や植生を復元するうえで貴重な資料となっている。

縄文時代では、松山市内でも確認事例の少ない草創期から早期にかけての遺物や遺構痕跡が検出されている。前述の東本遺跡4次調査では鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)が検出され、火山灰下位からは打製石鏃や槍先形石器、スクレーパーが出土したほか焼土塊などが検出されており、草創期から早

期に時期比定される。晩期では、松山市道榑味溝辺線道路改良工事に伴い実施した榑味立添遺跡3次調査において貯蔵穴と考えられる数基の土坑が検出され、当地域における定住生活の初現を知る重要な資料といえる。

弥生時代

榑味遺跡1次調査では前期前半の溝や土坑が検出され、同5次調査からは堅穴住居と土坑が確認されている。また、前述の榑味立添遺跡3次調査では環濠状を呈する前期末の大溝が検出されており、前期の集落様相を知るうえで貴重な手がかりとなっている。

中期になると、前半の遺構では東野森ノ木遺跡4次調査から土坑と土器棺が確認されているが、全般に検出事例は少なく、分布や詳細は不明な点が多い。後半になると、遺構・遺物数共に検出事例が増加する。東野森ノ木遺跡2次調査や榑味高木遺跡7次調査、榑味四反地遺跡9次調査からは円形堅穴住居や土坑が多数検出されており、本格的な集落経営の始まりが伺い知れる。後期では、後期後葉から末にかけて堅穴住居の検出事例がさらに増加し、加えて他地域との交流を示す資料が多数確認されている。特に、東本遺跡4次調査をはじめ、周辺地域で実施した調査では大型円形堅穴住居を中心に小型方形堅穴住居が多数検出され、ベッド状遺構を付設する住居や副次的な炉を持つ住居のほか、鉄器を保有する住居の検出など、当時の住居形態や集落様相を解明する貴重な資料が数多く得られている。遺物では、東本遺跡4次調査から出土した船載鏡の破片や榑味立添遺跡1次調査出土の貨泉、榑味高木遺跡3次調査出土の準博造船を描いた絵画土器、榑味四反地遺跡4次調査出土の完形碧玉製管玉などがあり、これらは他地域との交流の中で獲得されたものと考えられる。

古墳時代

前期では、榑味四反地遺跡6次、8次、12次調査で確認した巨大建物が特筆される。総柱構造の床東式建物で、首長層に係わる特殊建造物と考えられている。中期になると、榑味四反地遺跡や榑味高木遺跡など、榑味地区を中心に堅穴住居の検出事例が急増する。また、遺構や包含層中より渡来系遺物の確認される事例が平野全体を見ても顕著である。後期には同地区内にて多数の堅穴住居が検出されており、集落が継続して経営されていたことを示している。

一方、桑原地区には2基の前方後円墳が所在する。経石山古墳は全長48.5mを測る古墳で、5世紀末の造営である。三島神社古墳は経石山古墳の東方に存在していたが、宅地造成により現在は消失している。初期畿内型の横穴式石室を内部主体にもつ全長約45mの古墳で、6世紀初頭の造営と考えられている。このほか、桑原地区東側の丘陵上には東野お茶屋台古墳群や畑寺古墳群など、古墳時代中・後期の群集墳が存在している。特に、東野お茶屋台古墳群内では東野お茶屋台遺跡として7度の調査が実施され、30基の古墳（東野お茶屋台1号墳～30号墳と呼称）が発見されている。内部主体は大半の古墳で削平されているが、11号墳からは横穴式石室2基と堅穴式石室1基が検出されている。その他の古墳は周溝のみの検出である。墳形をみると円墳23基、方墳2基、不明5基となる。方墳の規模は不明であるが、円墳は周溝径8～20mを測る。遺物は主に5世紀末～7世紀初頭に時期比定される須恵器のほか、円筒埴輪や形象埴輪、鉄器、石器、耳環、ガラス玉などが出土している。なお、1号墳から8号墳までは発掘調査が実施されておらず、規模や内部主体等は不明である。各古墳の分布や詳細は第3図と表2に記す。



- ① 泉原高井遺跡3次 ② 宋本遺跡8次 ③ 東野お茶屋台遺跡8次 ④ 東野森ノ木遺跡 ⑤ 樽味立原遺跡3次
 ⑥ 樽味西反地遺跡6次 ⑦ 樽味遺跡 ⑧ 宋本遺跡4次 ⑨ 泉原田中遺跡3次 ⑩ 東野お茶屋台遺跡
 ⑪ 畑寺竹ヶ谷古墳 ⑫ 三島神社古墳 ⑬ 鏡石山古墳 ⑭ 湯繁城跡

第2図 周辺主要遺跡分布図(S=1:25,000)



第3図 東野お茶屋台遺跡分布図

調査名	古墳名	墳 丘		内部主体	遺 物	時 期	備 考
		墳形	規模等				
東野お茶屋台 (4次)	1号墳	不明					未調査
	2号墳	円形					未調査
	3号墳	円形					未調査
	4号墳	円形					未調査
	5号墳	円形					未調査
	6号墳	円形					未調査
	7号墳	不明					未調査
	8号墳	不明					未調査
	9号墳	方形	周溝		須恵・土師・埴輪・鉄鏃	6c	
	10号墳	円形	径15m、周溝		須恵・埴輪・石器	6c	
東野お茶屋台 (5次)	11号墳	円形	径20m	横穴式石室	須恵・耳環・鉄斧・鉄鏃	6c末～7c初	(第1石室)
				横穴式石室	土師		(第2石室)
				竪穴式石室			(第3石室)
東野お茶屋台 (2次)	12号墳	円形	径10m、周溝		須恵・弥生	5c末～6c初	
	13号墳	円形	径16m、周溝		須恵・埴輪・石器	5c末～6c初	
	14号墳	円形	周溝		須恵・弥生・埴輪・鉄器	6c中	
	15号墳	円形	径13m、周溝	石室?			
東野お茶屋台 (3次)	16号墳	円形	径8m、周溝		弥生	5c末	
	17号墳	円形	径9m、周溝		須恵・弥生	6c	
	18号墳	円形	径14m、周溝		須恵・土師・埴輪・鉄鏃	5c末	
	19号墳	円形	径16m、周溝		須恵・弥生・石器	5c末	
東野お茶屋台 (6次)	20号墳	円形	径10m、周溝		須恵・鉄器		
	21号墳	円形?	径16m、周溝		須恵・埴輪	6c中～後	
	22号墳	円形	径9m、周溝		須恵・弥生		
	23号墳	円形	径8m、周溝		須恵・弥生	5c末～6c初	
	24号墳	円形	径10m、周溝		須恵・埴輪・鉄鏃	5c末	
東野お茶屋台 (7次)	25号墳	不明	周溝		須恵・埴輪		
	26号墳	円形	径10m、周溝		須恵・土師		
	27号墳	円形	径9m、周溝				
	28号墳	方形?	周溝		須恵	6c	
	29号墳	不明	周溝		須恵	6c	
	30号墳	円形	径8m、周溝		須恵・ガラス玉	6c後半	

【参考文献】 梅木謙・2002 「桑原地区の遺跡Ⅳ」松山市文化財調査報告書 第86集

表2 東野お茶屋台古墳一覧

古 代

古代の遺構は検出事例が少なく、集落様相は不明な点が多い。榑味四反地遺跡5次調査では7～8世紀の自然流路が検出され、陶製の硯や奈良三彩の壺などが流路内から出土している。これらの遺物は調査地や周辺地域における官衙や寺院に関連する施設の存在を示唆するものといえよう。

中 世

桑原遺跡2次調査では13世紀代の溝が検出されているほか、榑味遺跡2次調査からは14～16世紀代の集落関連遺構が確認されている。東野森ノ木遺跡からは、完形の白磁壺が埋納された土坑が検出されたほか、桑原山中遺跡3次調査では14～15世紀代の土坑墓が発見されている。近年の発掘調査により数々の中世遺跡が発見されており、桑原・榑味地区における中世集落の広がりや様相が解明されつつある。

【参考文献】

- 高尾和長 1992 『桑原西稲葉遺跡2次調査』『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第26集
 高尾和長 1996 『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』松山市文化財調査報告書第54集
 高尾和長 2007 『榑味立添遺跡3次調査』松山市文化財調査報告書第117集
 宮本一夫 1989 『鷹子・榑味遺跡』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ
 河野史知 2007 『東野森ノ木遺跡1・2・4次調査』松山市文化財調査報告書第117集
 加島次郎 2007 『榑味高木遺跡7次調査』松山市文化財調査報告書第117集
 加島次郎 2007 『榑味四反地遺跡9次調査』松山市文化財調査報告書第117集
 梅木謙一 1992 『榑味立添遺跡』『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第26集
 宮内慎一 1994 『榑味高木遺跡3次調査』『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書第46集
 加島次郎 1994 『榑味四反地遺跡4次調査』松山市文化財調査報告書第46集
 橋本謙一 2003 『榑味四反地遺跡6次調査』松山市文化財調査報告書第94集
 加島次郎 2007 『榑味四反地遺跡8次調査』松山市文化財調査報告書第117集
 相原秀仁 2009 『榑味四反地遺跡12・13次調査』松山市文化財調査報告書第130集
 田崎博之 1993 『榑味遺跡2次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ
 山本健一 1997 『桑原山中遺跡3次調査』『桑原地区の遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書第58集

第2章

桑原高井遺跡3次調査

第2章 桑原高井遺跡3次調査

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

2000（平成12）年7月27日、岡田毅氏より松山市桑原1丁目779番2地内における専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

確認願が提出された申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.157桑原遺物包含地」内にあたる。同包蔵地内には桑原高井遺跡があり、弥生時代後期の竪穴住居が検出されている。周辺では申請地西方に所在する東本遺跡4次調査において、弥生時代後期後葉から末葉に時期比定される竪穴住居や溝が多数検出されている。調査では、竪穴住居SB203から周堤帯が検出されたほか、SB302からは破鏡が出土している。また、同調査では始良カルデラ火山灰（AT）が層位的に確認されている。

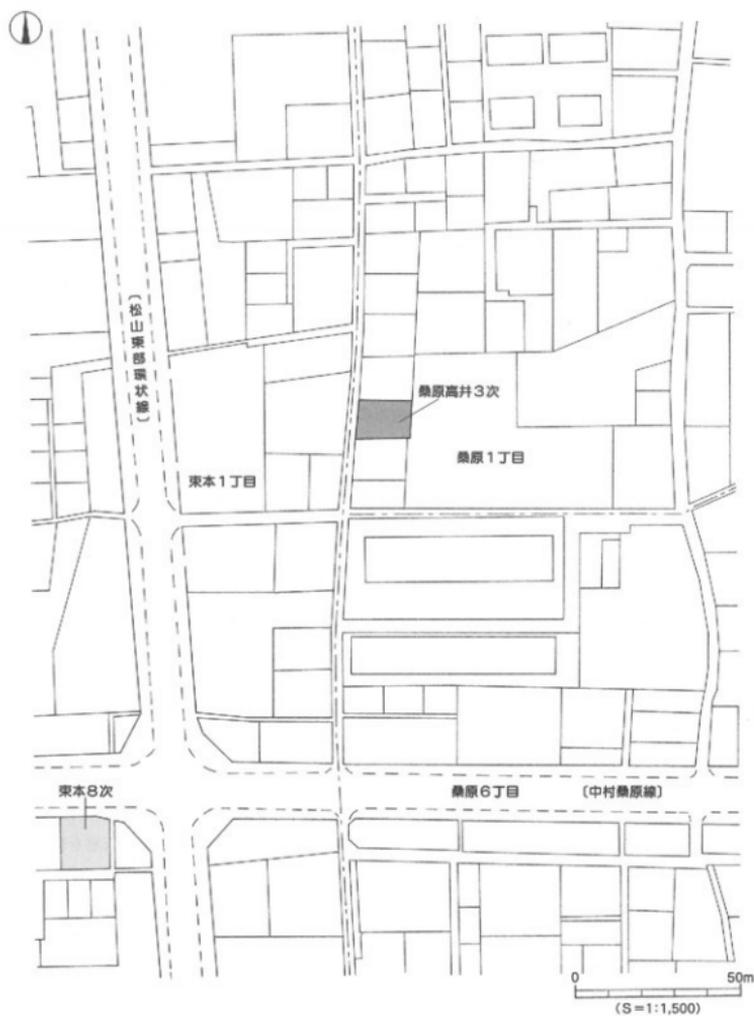
これらのことから文化財課と申請者は協議を行い、申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、2000（平成12）年7月28日、文化財課による試掘調査が実施された。調査の結果、土坑と弥生土器を含む遺物包含層を検出した。

この結果を受け、文化財課と申請者は遺跡の取り扱いについての協議を重ね、住宅建設によって失われる遺跡に対して記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は申請地を含めた周辺地域における弥生時代の集落構造解明を主目的とし、文化財課が主体となり、国庫補助事業として2001（平成13）年7月12日より開始した。

(2) 調査の経緯

2001（平成13）年7月12日、重機による表土掘削作業を開始する。7月16日より作業員を導入し、第IV層黒色シルト上面にて遺構検出作業を行う。第IV層上面からは土坑や柱穴を検出したが、明確な平面プランが確定できず、第V層灰黄褐色シルト上面まで掘り下げて遺構を検出することとなった。7月23日から第IV層の掘り下げを開始し、8月2日、第V層上面にて平面精査や上層確認作業を行った。8月10日、株式会社アイシン調査設計に基準点測量業務を委託し、調査地内に4級基準点3点を設置した。8月15日、遺構検出作業を終了し、竪穴住居や溝、土坑等を検出した。8月16日、高所作業車を使用し、第V層上面での遺構検出状況写真を撮影する。8月22日より、溝の掘り下げと柱穴の半截作業を進め、8月28日からは土坑、及び掘立柱建物の調査を進める。9月11日には竪穴住居の調査を開始し、同時に調査壁沿いにトレンチを掘削し土層確認作業を行った結果、AT火山灰層を検出した。9月19日、検出した遺構の掘り下げがほぼ終了し、9月20日には高所作業車を使用した遺構完掘状況写真を撮影した。9月21日からは竪穴住居の測量や調査壁土層図の作成等をし、10月2日、すべての測量作業や写真撮影を終了する。10月3日、午前中には桑原小学校生徒33名が調査地に来場し、現地見学を行う。午後には遺構保護のため、遺構内に真砂土を搬入する。10月4日と5日の2日間にて重機の使用による埋戻し作業を行い、10月5日、発掘作業を終了する。



第4図 調査地位置図

(3) 調査組織

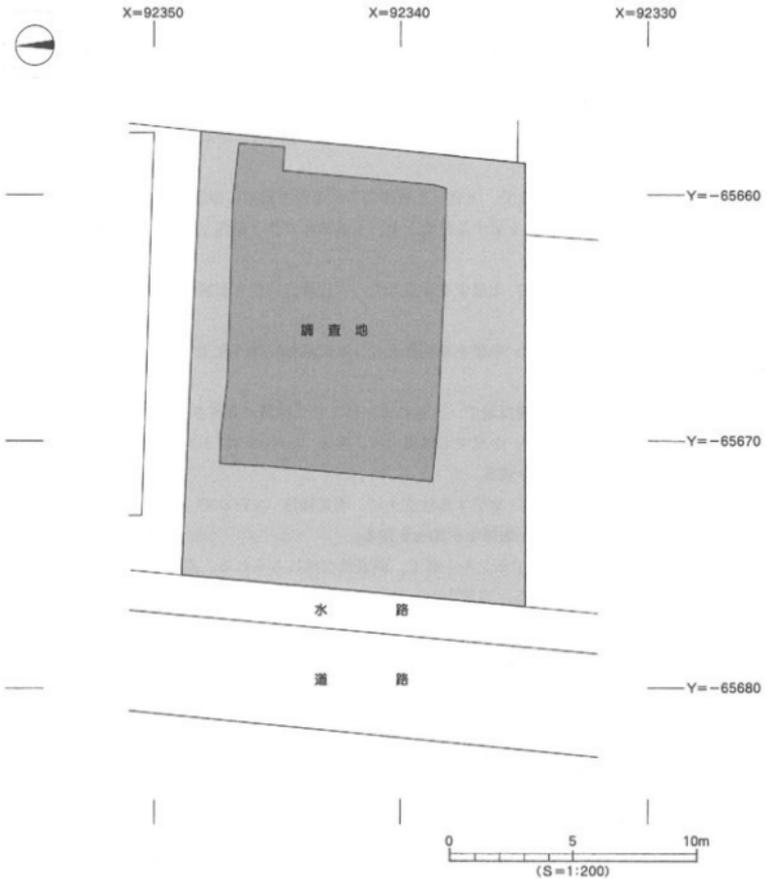
所在地：松山市桑原1丁目779番2

調査期間：2001（平成13）年7月12日～同年10月5日

調査面積：241.04㎡

調査主体：松山市教育委員会

調査担当：松山市教育委員会文化財課 小笠原 彰（退職）



第5図 調査地測量図

2. 層位

(1) 基本層位 (第6図)

調査地は右手川中流左岸の低位段丘上、標高35m前後に立地する。調査以前は更地であった。調査地の基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層水田耕作に伴う耕土、第Ⅲ層水田耕作に伴う攪乱層、第Ⅳ層黒色シルト、第Ⅴ層灰黄褐色シルト、第Ⅵ層暗褐色粘質土、第Ⅶ層黒褐色粘質シルト、第Ⅷ層AT火山灰を含む土層である。なお、第Ⅵ層以下は調査地東壁沿いに設定したトレンチにて確認した土層である。また、第Ⅷ層は調査地西側に所在する東本遺跡4次の調査所見などから、AT火山灰の二次堆積層と考えられる。

第Ⅰ層：近現代の造成土で、土色・土質の違いにより2層に分層される。

第Ⅰ①層-褐色 (10YR4/1) を呈する粘質土で、造成以降の腐植土である。層厚3~24cmを測る。

第Ⅰ②層-にぶい黄褐色 (10YR5/4) を呈する砂質土で、造成にかかる真砂土である。層厚3~20cmを測る。

第Ⅱ層：近現代の農耕に伴う耕土で、土色・土質の違いにより3種類に分層される。

第Ⅱ①層-黄灰色 (2.5Y4/1) を呈する砂質土で、水田耕作に伴う耕作土である。層厚2~20cmを測る。

第Ⅱ②層-明黄褐色 (2.5Y6/8) を呈する砂質土で、水田耕作に伴う旧耕作土である。層厚2~5cmを測る。

第Ⅱ③層-暗灰黄色 (2.5Y4/2) を呈する粘質土で、水田耕作に伴う床土である。層厚2~7cmを測る。

第Ⅲ層：近現代の農耕における攪乱層で、土色の違いにより2種類に分層される。

第Ⅲ①層-暗灰黄色 (2.5Y4/2) を呈する砂質土に、黒色 (10YR2/1) シルトがブロック状に混入する。層厚2~10cmを測る。

第Ⅲ②層-暗灰黄色 (2.5Y4/2) を呈する砂質土に、明黄褐色 (2.5Y6/8) 砂質土や黒色 (10YR2/1) シルトが混入する。層厚2~20cmを測る。

第Ⅳ層：黒色 (10YR2/1) を呈するシルト層で、調査地全域にみられる。調査地北側の堆積が最も厚く、層厚3~20cmを測る。本層中からは、弥生土器片が少量出土した。なお、本層上面にて土坑や柱穴を検出した。

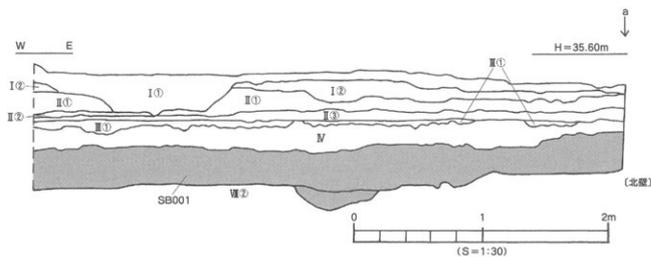
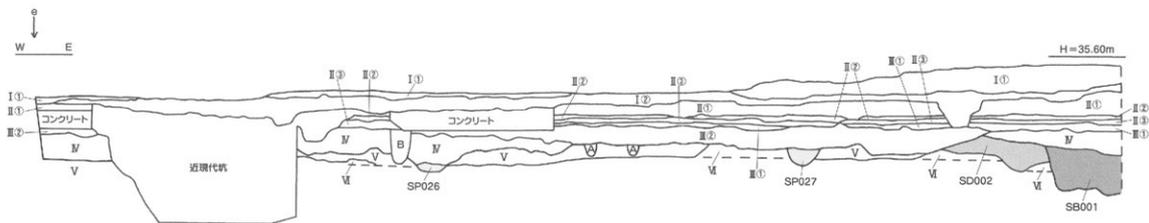
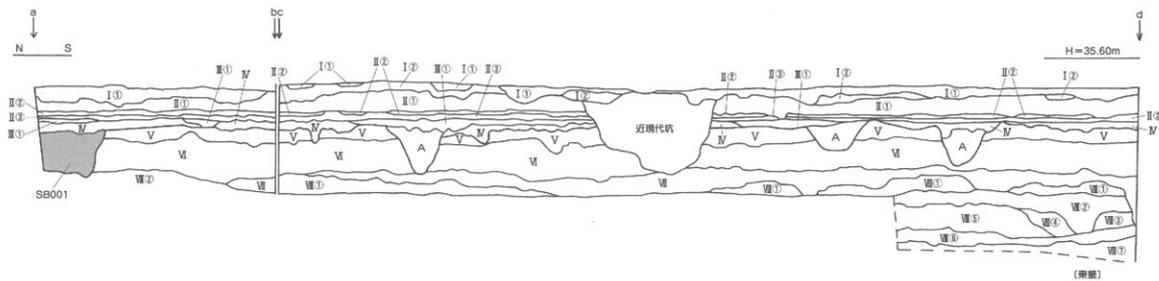
第Ⅴ層：灰黄褐色 (10YR4/2) を呈するシルト層で調査地全域にみられ、層厚3~10cmを測る。本層上面が調査における最終遺構検出面である。本層上面からは、竪穴住居や溝、土坑、柱穴を検出した。なお、本層上面の標高を測量すると調査地南東部が最も高く、標高35mを測り、北西部に向けて緩やかな傾斜をなし、調査地北西部では標高34.8mを測る。本層中からは、遺物の出土はない。

第Ⅵ層：暗褐色 (7.5YR3/3) を呈する粘土層で、少量の砂が混入する。層厚20~30cmを測る。

第Ⅶ層：黒褐色 (2.5Y3/1) を呈する粘質のシルト層で、層厚2~20cmを測る。

第Ⅷ層：AT火山灰を含む土層で、土色・土質・含有物の違いにより7種類に分層される。

第Ⅷ①層-オリブ褐色 (2.5Y4/6) を呈するシルトに、褐色 (10YR4/4) を呈する火山灰と砂が混入する。層厚5~12cmを測る。



- I① 褐灰色(10YR4/1)粘質土
- I② にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
- I③ 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土
- I④ 明黄褐色(2.5Y6/8)砂質土
- I⑤ 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
- II① 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土に黒色(10YR2/1)シルトがブロック状に混入
- II② 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土に明黄褐色(2.5Y6/8)粘質土と黒色(10YR2/1)シルトが混入
- IV 黒色(10YR2/1)シルト
- V 灰黄褐色(10YR4/2)シルト
- VI 紫褐色(7.5YR3/3)粘土と少量の砂が混入
- V① 黄褐色(2.5Y3/1)粘質シルト
- V② オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルトに砂混入
- V③ 明黄褐色(10YR6/6)シルトに砂粒と小礫混入
- V④ 明黄褐色(10YR6/6)シルトに砂粒混入
- V⑤ 褐色(10YR4/4)粘質シルトに砂粒混入
- V⑥ 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト
- V⑦ にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトに砂粒混入
- V⑧ 明黄褐色(10YR7/6)シルトに白色粘粒混入
- A 黄褐色(10YR3/1)シルト
- B 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト

第6図 調査地東壁・北壁土層図

第Ⅷ②層-明黄褐色(10YR6/6)を呈するシルトに、褐色(10YR4/4)を呈する火山灰と砂粒や小礫が混入する。層厚8~30cmを測る。

第Ⅷ③層-明黄褐色(10YR6/6)を呈するシルトに、少量の砂粒が混入する。層厚12cmを測る。

第Ⅷ④層-褐色(10YR4/4)を呈する粘性の強いシルトに、少量の砂粒が混入する。層厚18cmを測る。

第Ⅷ⑤層-暗褐色(10YR3/4)を呈する粘性の強いシルトで、層厚25cmを測る。

第Ⅷ⑥層-にぶい黄褐色(10YR4/3)を呈するシルトで、上位に少量の砂粒が混入する。層厚3~12cmを測る。

第Ⅷ⑦層-明黄褐色(10YR7/6)を呈するシルトで、白色砂粒が混入する。層厚20cm以上を測る。

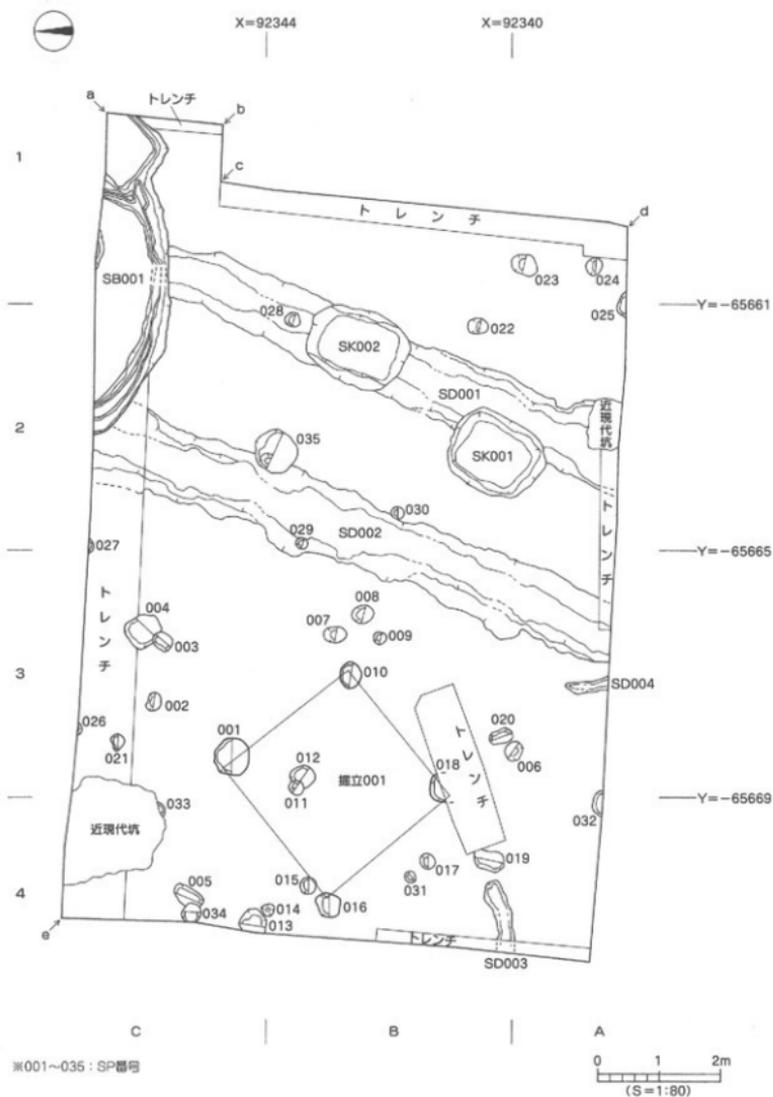
(2) 検出遺構・遺物

調査では、竪穴住居1棟、掘立柱建物3棟、溝4条、土坑3基、柱穴84基(掘立柱建物柱穴12基を含む)を検出した。検出した遺構は、表3に示す。遺物は遺構及び包含層中より、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄が出土した。なお、遺物の出土量は、収納箱(44×60×12cm)12箱分である。

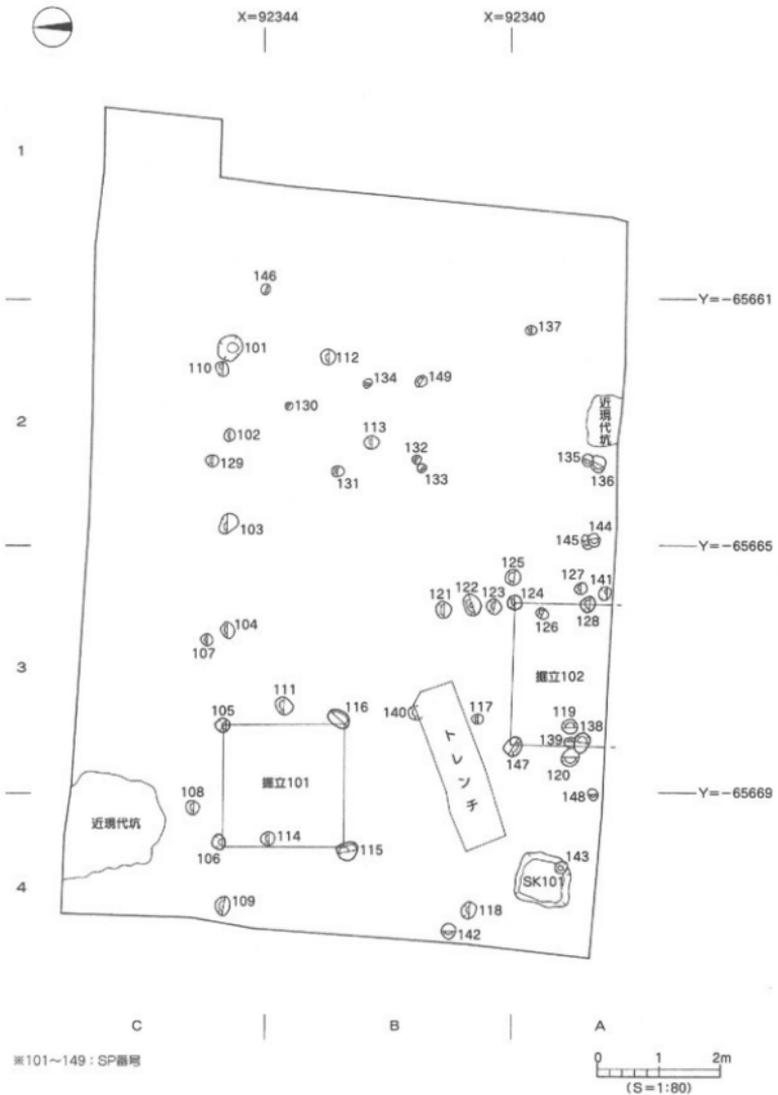
調査にあたり、調査地内を4m四方のグリットに分けた。グリットは南側から北側に向けてA・B・C、東側から西側に向けて1・2・3・4とし、A1・A2・・・C4といったグリット名を付した。グリットは包含層掘り下げ時の遺物取り上げや、遺構の位置表示等に利用した。

表3 検出遺構一覧

	竪穴	掘立	溝	土坑
弥生後期後葉			SD001・002 SD003・004 〔後期以降〕	SK001・002 〔後期後葉以降〕
弥生末	SB001	掘立001 〔弥生末以降〕		
中世		掘立101・102		SK101



第7図 遺構配置図(1)



※101~149: SP番号

第8図 遺構配置図(2)

3. 遺構と遺物

調査では竪穴住居1棟、掘立柱建物3棟、溝4条、土坑3基、柱穴84基（掘立柱建物柱穴12基を含む）を検出した。遺構は第Ⅳ層及び第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅴ層上面では竪穴住居1棟（SB001）、掘立柱建物1棟（掘立001）、溝4条（SD001～004）、土坑2基（SK001・002）、柱穴35基（SP001～035）を検出し、第Ⅳ層上面からは掘立柱建物2棟（掘立101・102）、土坑1基（SK101）、柱穴49基（SP101～149）を検出した。ここでは、遺構別に規模や構造、出土遺物等を説明する。

（1）竪穴住居

SB001（第7・9・10図、図版4・5）

調査地北東隅C1・2区に位置する。第Ⅴ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第Ⅳ層上面から掘削された遺構である。住居東側は2本の溝（SD001・002）を切り、住居北側は調査区外の為、住居の全容は不明である。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.16m、南北検出長1.24m、壁高は38cmを測る。住居埋土は二層に分層され、埋土上位は1層（黒色シルトに暗褐色粘土が斑点状に混入）、埋土下位は4層（黒褐色シルトに明黄褐色シルトがブロック状に混入）である。内部施設は、住居壁体沿いにて二重に巡る周壁溝を検出した。壁溝は一部重複する箇所があり、住居の改築が施されたものと考えられる。外側を巡る壁溝の規模は幅10～22cm、深さ3～5cmを測り、埋土は2層（黒色シルトに明黄褐色シルトがブロック状に混入）である。内側を巡る壁溝の規模は幅8～12cm、深さ6～10cmを測り、埋土は3層（黒褐色シルトに明黄褐色シルトが斑点状に混入）である。なお、調査壁の土層観察により内側の溝が外側の溝に先行することから、住居を拡張したものと考えられる。

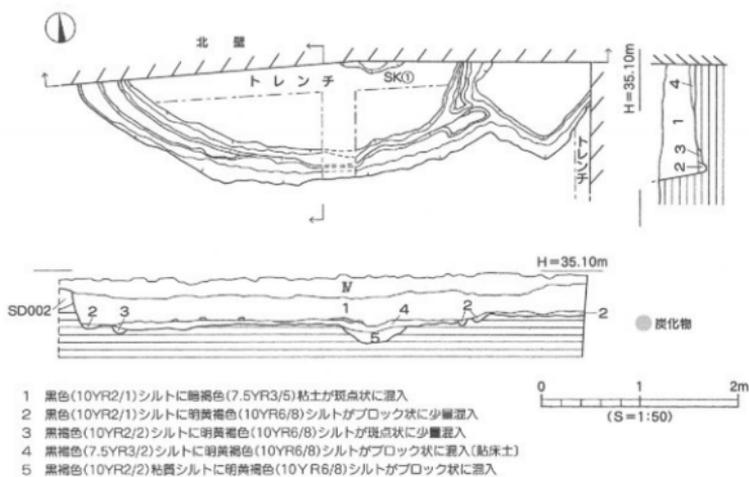
このほか、SB001東側には方形状の張出部が付設されている。住居検出時には重複する二棟の住居を想定したが、断面観察では明確な切り合いは認められなかった。しかしながら、平面精査や住居埋土掘り下げ時に住居内部から張出部に向けて周壁溝が連続していることが判明し、さらに共通の埋土が認められた。張出部は検出長1.14m、検出幅0.68m、深さ36cmを測る。埋土は住居埋土の1層である。張出部底面と住居底面との高低差はほとんどなく、住居の入口の可能性がある。

住居底面には4層（黒褐色シルトに明黄褐色シルトがブロック状に混入）で硬く締められた貼床が施されており、貼床は厚さ6～8cmを測る。住居底面中央東寄りにて、楕円形土坑（SK①）を検出した。規模は検出長0.66m、検出幅0.12m、深さ17cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は5層（黒褐色粘質シルトに明黄褐色シルトがブロック状に混入）である。土坑上面は貼床土（4層）が覆うことから、SK①は住居改築以前の遺構である。なお、住居壁体は第Ⅵ層、住居底面は第Ⅷ②層に及んでいる。

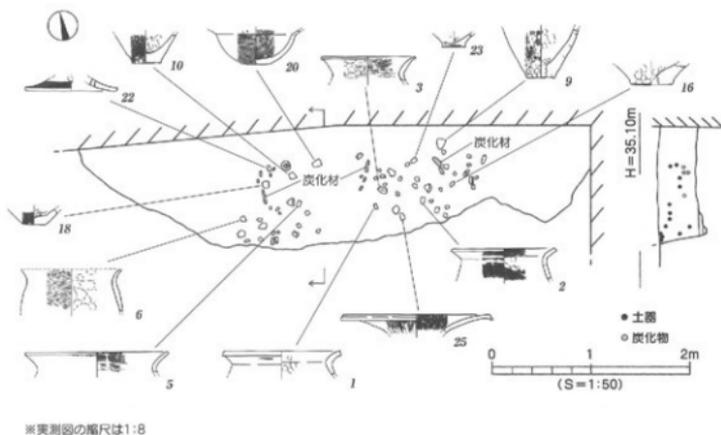
遺物は1層中及び貼床上面からの出土であり、貼床上面からは変形土器の口縁部（3）や底部（10・18）、鉢形土器（20）などが出土し、住居及び張出部の1層中からは変形土器（5・6）や高坏形土器（25）などが出土した。また、貼床直上付近からは炭化材が数点出土した。炭化材は、幅2～5cm、厚さ0.5～0.8cmを測る。

出土遺物（第11・12図、図版9・10）

1～29は住居内部、30～37は張出部からの出土品である。1～10は変形土器。1～4は「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。1は口縁端部がナデ凹む。2・3の胴部内外面にはハケ



第9図 SB001測量図



第10図 SB001遺物測量図

メ調整を施す。5・6は外反口縁を呈し、5は口縁端部を丸く仕上げる。6の外面にはヨコないしナナメ方向のヘラミガキ調整を施す。7～10は底部。7・8は平底、9・10はわずかに上げ底となる。なお、7の外面にはタタキ痕が残り、その他はタテ方向のハケメ調整を施す。11～18は壺形土器。11・12は複合口縁壺で、口縁端部は内傾する。11は口縁外面に櫛描き波状文4条を施す。13は長頸壺の頸部片で、頸部中位に櫛描き細沈線文12条以上を施す。外面にはタテ方向の細かなヘラミガキ調整を施す。14・15は肩部片で、14はヘラ描きによる弧状の沈線文（絵画か？）、15は直線状の沈線文3条を施す。16～18は底部で、平底となる。19～24は鉢形土器。19は推定口径25.2cmを測る大型品で口縁部は外反し、口縁端部はナデ凹む。20は外反口縁を呈する鉢で、底部は平底である。内外面共に、ハケメ調整を施す。21・22は脚付鉢の脚部片で、22は脚部部に櫛描き細沈線文15条を施し、径0.8cm大の円孔を2箇所看取する。23は突出部をもつ上げ底、24はボタン状の突出部をもつ、わずかに上げ底の底部である。25～28は高坏形土器。25は口縁部が大きく外反し、口縁端部は垂下する。内外面共に丁寧なヘラミガキ調整を施す。26は坏部下位に明瞭な稜をもち、内外面共にヘラミガキ調整を施す。27は柱部片で、柱部上位はハケメ調整、下位にはタテ方向のヘラミガキ調整を施す。28は脚部の小片で、裾部上端面に半截竹管文を施す。29は支脚形土器の受部である。断面形態は楕円形を呈する。30は甕形土器。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。31～33は壺形土器の頸～肩部片。33は凸帯上に刻目を施す。32の外面にはタテ方向のヘラミガキ調整を施す。34は脚付鉢の脚部片で、内外面共にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。35・36は甕形土器、37は壺形土器の底部で、平底となる。

時期：出土した遺物の特徴より、SB001の廃棄・埋没時期は弥生時代末とする。

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物は3棟を検出した。掘立001は第V層、掘立101・102は第IV層上面での検出である。

掘立001（第7・13図）

調査地西側B3～C4区に位置する。建物南側柱穴（SP018）はトレンチにより一部削平されている。1間×1間規模の建物で、規模は東西長2.60m、南北長2.66mを測る。建物方位はN-40°-Wにとる。建物を構成する柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.34～0.60m、深さは検出面下6～18cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色シルト（暗褐色粘土がブロック状に混入）の単一層である。柱痕は検出されなかった。遺物は柱穴内より、弥生土器片が数点出土した。

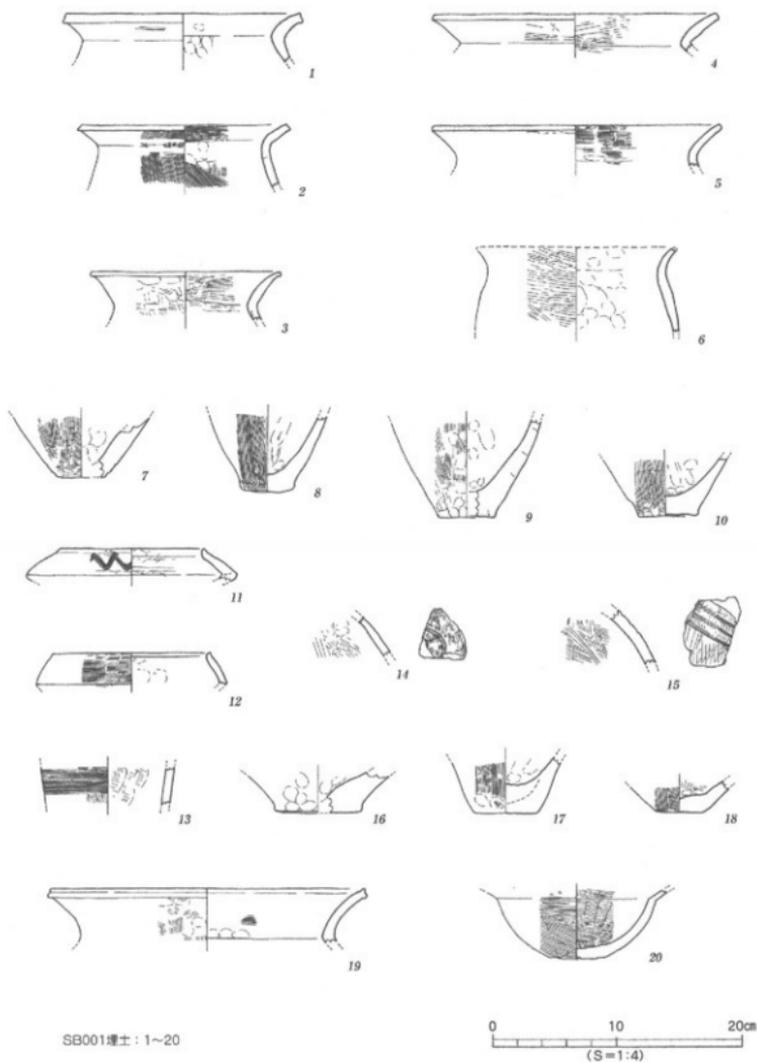
出土遺物（第13図、図版10）

38は弥生土器の鉢形土器。直口口縁を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。外面はタタキ痕が残り、内面にはハケメ調整を施す。39は支脚形土器で、柱部は中空となる。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代末以降とする。

掘立101（第8・14図）

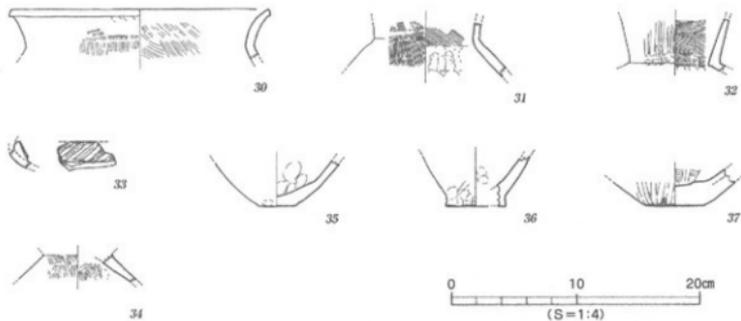
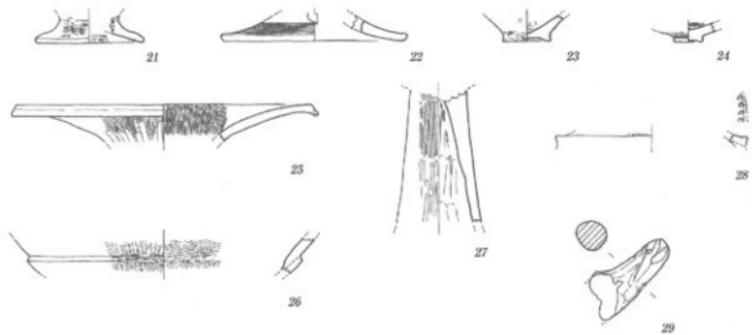
調査地西側B3～C4区に位置する。1間×1間規模の建物で、建物方位をほぼ真北にとる。規模は東西長2.06m、南北長1.98mを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.22～0.38m、深さは検出面下8～20cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗灰黄色砂質シルトを基調とし、黒色シルトがブロック状または斑点状に混入するものである。柱痕はSP115で検出され、柱痕径は約12cmを測る。遺物はSP106より弥生土器片や土師器片の細片が数点出土したが、円化しうるもの



第11図 SB001 出土遺物実測図(1)

はない。

時期：時期比定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土や出土遺物より概ね、中世の遺構とする。



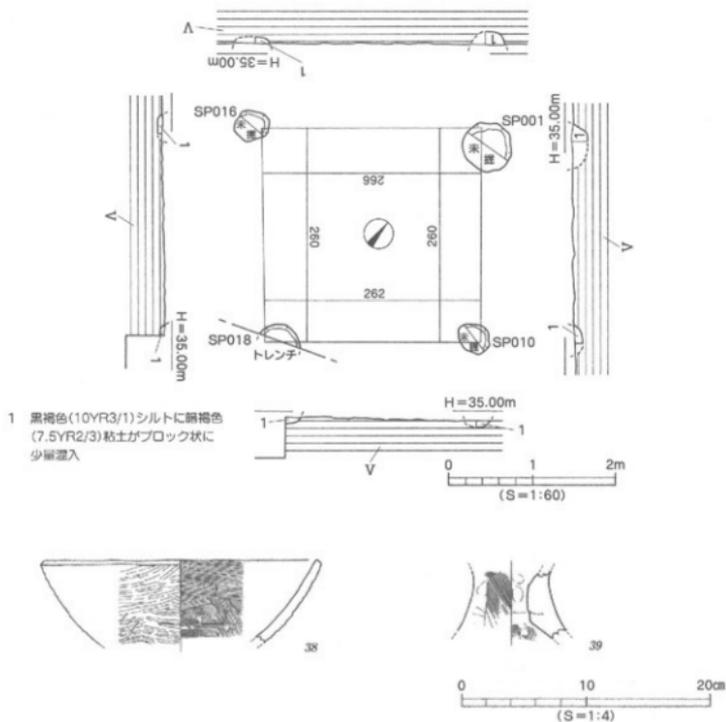
SB001埋土 : 21~29
SB001掘出部 : 30~37

第12図 SB001 出土遺物実測図 (2)

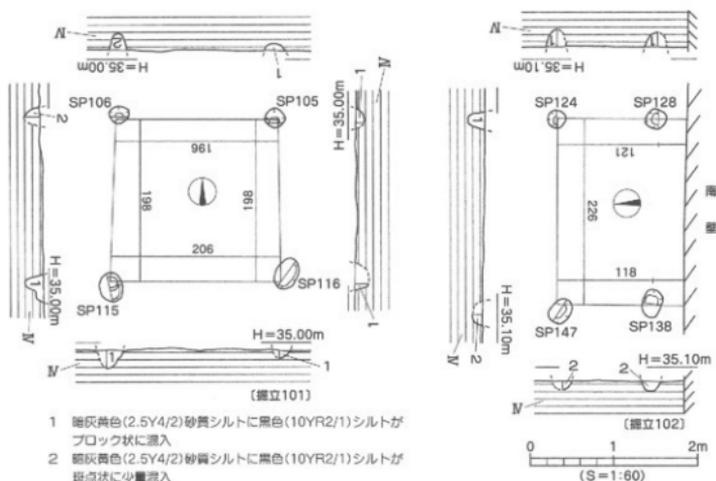
掘立102 (第8・14図)

調査地中央部西寄りA・B3区に位置し、建物南側は調査区外に続く。1間×1間以上の南北棟で、東西長2.26m、南北検出長1.21mを測る。建物方位はN-3°-Wにとる。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.23~0.34m、深さは検出面下10~22cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗灰黄色砂質シルトを基調とし、黒色シルトがブロック状または斑点状に混入するものである。柱痕は検出されなかった。遺物はSP124内より少量の弥生土器片や上師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期比定される遺物の出土はないが、掘立101と柱穴埋土が酷似することから概ね、中世の遺構とする。



第13図 掘立001 測量図・出土遺物実測図



第14図 掘立101・102 測量図

(3) 溝

調査では、溝4条を検出した。すべて、第V層上面での検出である。

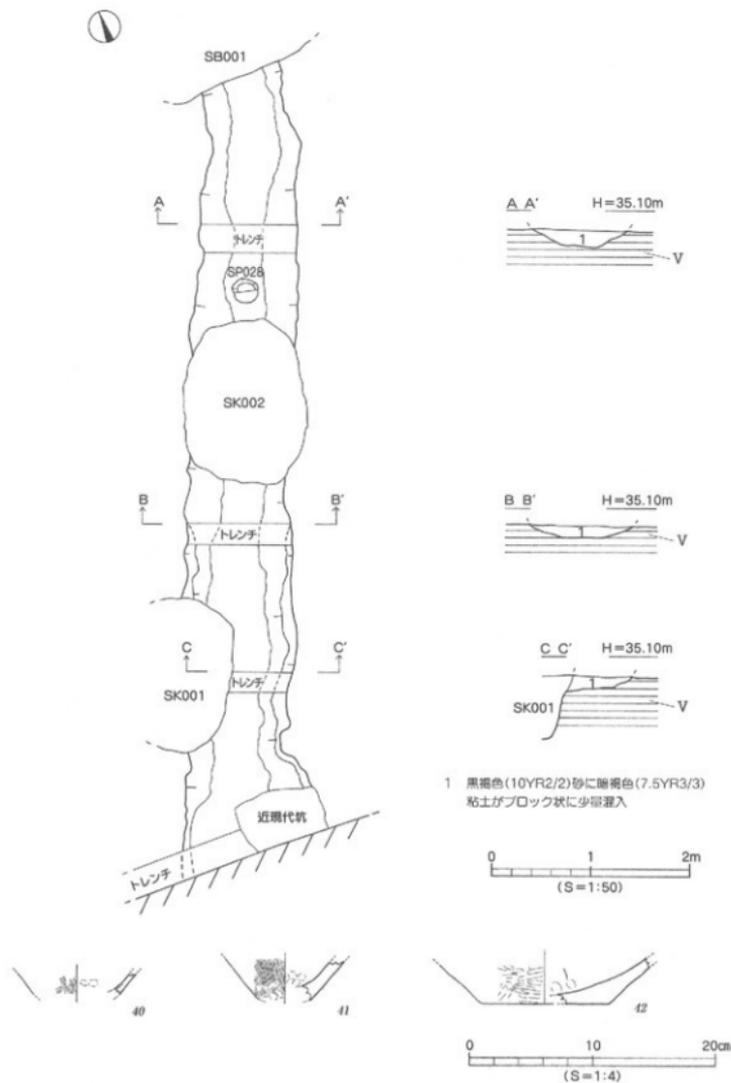
SD001 (第7・15図、図版6)

調査地東側A2～C2区で検出した北東-南西方向の溝で、溝北側はSB001に切られ、溝中央部は土坑SK002、溝南側はSK001と近現代坑に切られ、溝南端は調査区外に続く。規模は検出長7.98m、検出幅0.80～1.26m、深さは検出面下15cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色砂を基調とし、暗褐色粘土がブロック状に少量混入するものである。堆積状況から、流水により短期間に埋没したものと推測される。溝基底面には凹凸がみられず平坦であるが、溝南側から北側に向けて緩やかな傾斜をなす(比高差3cm)。溝北側基底面にて、柱穴1基(SP028)を検出した。SP028は径25cmを測る円形柱穴で、埋土は黒褐色シルトの単一層である。柱穴内からは、遺物の出土はない。溝内からは埋土中より少量の弥生土器片が出土した。

出土遺物 (第15図)

40は弥生土器の高坏形土器。坏部の小片で、外面にミガキ痕が残る。41は壘形土器、42は壘形土器の底部片で、42は外面にヨコないしナメ方向のヘラミガキ調整を施す。

時期：SB001に切られることや出土遺物の特徴より、弥生時代後期後葉の溝とする。



第15図 SD001 測量図・出土遺物実測図

SD002 (第7・16図、図版6)

調査地中央部A3～C2区で検出した北東-南西方向の溝で、溝北側はSB001、中央部は2基の柱穴(S P030・035)に切れ、溝南端は調査区外に続く。規模は検出長8.94m、検出幅0.94～1.38m、深さは検出面下20cmを測る。断面形態はレンズ状を呈するが、溝北側及び南側壁面には段掘り状となる箇所がみられる。埋土はSD001と同様、黒褐色砂を基調とし、暗褐色粘土がブロック状に少量混入するものである。溝基底面には凹凸がみられず、ほぼ平坦である。溝中央部基底面にて、柱穴1基(S P029)を検出した。S P029は径18cm、深さ10cmを測る円形柱穴で、埋土は黒褐色シルトの単一層である。柱穴内からは、遺物の出土はない。溝内からは、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第16図)

43・44は弥生土器。43は甕形土器、44は壺形土器の底部である。平底で、44は外面にタテ方向のハケメ調整を施す。

時期：SB001に切られることや出土遺物の特徴より、弥生時代後期後葉の溝とする。

SD003 (第7・17図)

調査地南西隅B4区で検出した東西方向の短い溝で、溝東端は消失し、溝西側は調査区外へ続く。規模は検出長0.98m、検出幅0.20～0.32m、深さは検出面下6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色シルトの単一層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝内からは少量の弥生土器片が出土した。図化しうるものを1点掲載した。

出土遺物 (第17図)

45は甕形土器の胴部片で、内面にはハケメ調整を施す。

時期：時期比定しうる遺物の出土は少ないが、概ね弥生時代後期の溝としておく。

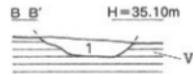
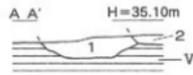
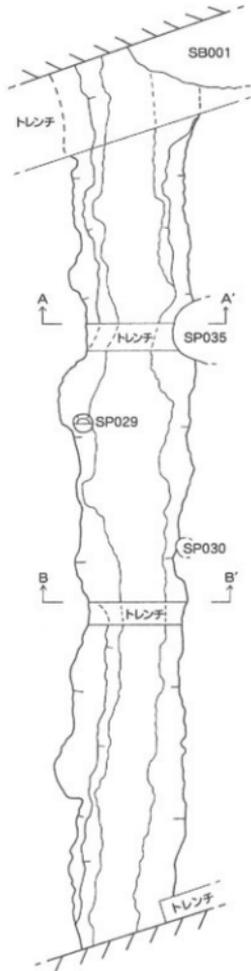
SD004 (第7・17図)

調査地南壁中央部西寄りA3区で検出した南北方向の短い溝で、溝北端は消失し、溝南側は調査区外に続く。規模は検出長0.68m、検出幅0.10～0.20m、深さは検出面下6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色シルトの単一層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝内からは弥生土器片が数点出土した。

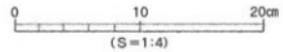
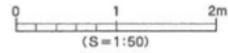
出土遺物 (第17図)

46は甕形土器の口縁部片で、口縁部は外反し、口縁端部はナデにより凹む。外面にはミガキ痕がわずかに残る。

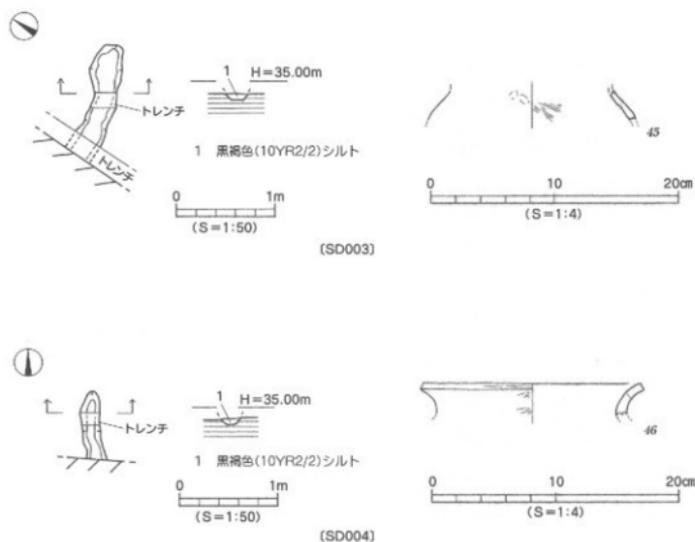
時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね弥生時代後期の溝としておく。



- 1 黒褐色(10YR2/2)砂に暗褐色(7.5YR3/3)粘土がブロック状に少量混入
- 2 黒色(10YR2/1)砂質シルト(SP035埋土)



第16図 SD002 測量図・出土遺物実測図



第17図 SD003・004 測量図・出土遺物実測図

(4) 土坑

調査では、3基の土坑を検出した。SK001・002は第V層、SK101は第IV層上面での検出である。

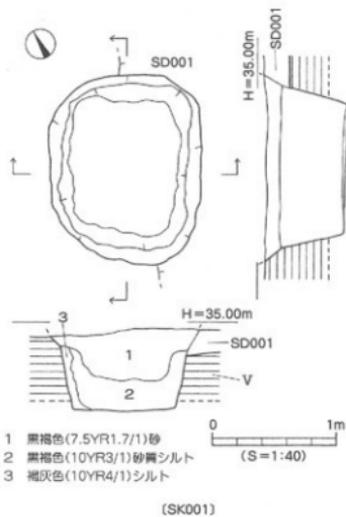
SK001 (第7・18図、図版7)

調査地南東隅A・B2区に位置し、土坑東側は溝SD001を切っている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.54m、短径1.26m、深さは検出面下66cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑上端部付近は段掘り状となっている。埋土は三層に分層され、土坑上位は1層(黒褐色砂)、下位には2層(黒褐色砂質シルト)、3層(褐灰色シルト)が堆積する。土坑基底面には凹凸がなく、平坦である。なお、土坑壁面及び基底面は第V層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SB001との切り合いより、概ね弥生時代後期後葉以降の土坑とする。

SK002 (第7・18図、図版7)

調査地東側B2区に位置し、溝SD001を切っている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.68m、短径1.26m、深さは検出面下60cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑東壁及び西壁上部は段掘り状となり、土坑下部は筒状になっている。埋土は二層に分層され、土坑上位は1層(黒褐色砂)、



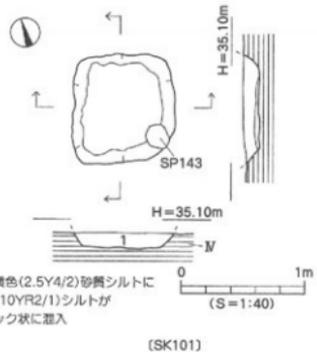
下位には2層(黒褐色砂質シルト)が堆積する。土坑基底面には凹凸がみられず、ほぼ平坦である。なお、土坑壁面及び基底面は第V層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、S B001との切り合いより、概ね弥生時代後期後葉以降の土坑とする。

SK101 (第8・18図)

調査地南西隅A4区に位置し、土坑南東隅はSP143(埋土：暗灰黄色シルト)に切られる。平面形態は不整の円形を呈し、規模は径0.84~0.86m、深さは検出面下14cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色砂質シルトを基調とし、黒色シルトがブロック状に混入するものである。土坑基底面は平坦であり、壁面及び基底面は第IV層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定はしかるが、検出面や埋土より概ね中世の遺構とする。



第18図 SK001・002・101 測量図

(5) 柱 穴 (第7・8図)

調査では、84基の柱穴を検出した。第IV層上面では35基 (S P 001~035)、第V層上面からは49基 (S P 101~149) を検出した。

各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.10~0.72m、深さは検出面下4~46cmを測る。柱穴掘り方埋土は、以下の5種類 (1類~5類) に分かれる。このうち、掘立101や102は2類、掘立001は4類の柱穴で構成される。なお、出土遺物や検出層位などから、1類と2類の柱穴は中世、その他は弥生時代の遺構と考えられる。

出土遺物 (第19図、図版10)

47はS P 034、48はS P 111出土品。47はバケツ型土器の底部片で、厚みのある平底である。48は甕形土器の底部で、外面にタタキ痕が残る。

表4 柱穴一覧

	柱穴埋土	数量	柱 穴 番 号	出土遺物
1類	暗灰黄色シルト	39基	SP101~104・107~114・117~123・125~127・129~134・136・137・139~143・145・146・148・149	弥生土器
2類	暗灰黄色シルト 黒色シルト混入	10基	SP105・106・115・116・124・128・135・138・144・147	弥生土器 土師器
3類	黒褐色シルト	5基	SP004・005・012・028・029	
4類	黒褐色シルト 暗褐色粘土混入	4基	SP001・010・016・018	弥生土器
5類	黒色シルト	26基	SP002・003・006~009・011・013~015・017・019~027・030~035	

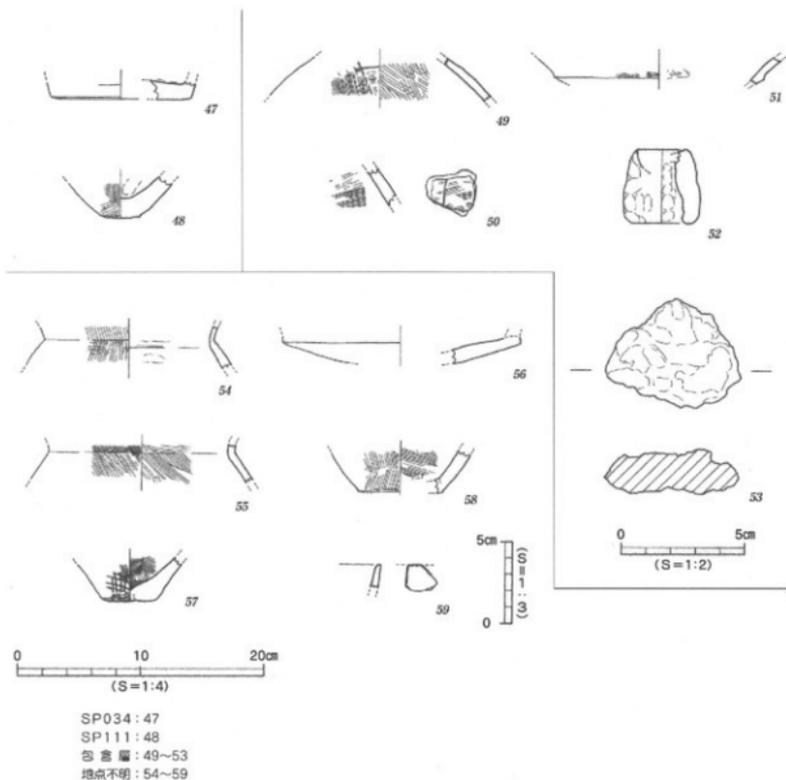
(6) 包含層出土遺物 (第19図、図版10)

49・50は壺形土器。49の肩部には「×」状の線刻を施す。50はヘラ状工具によるタテ方向の沈線文を施す。51は高坏形土器の坏部片で、坏部下に明瞭な稜をもつ。52は支脚形土器で、中空となる。52は鉄滓で、重量45.89gを測る。

(7) 地点不明出土遺物 (第19図)

54・55は甕形土器の胴部片、56は高坏形土器の坏部片である。57・58は甕形土器の底部で、57の外面にタタキ痕を残す。弥生末。59は肥前系磁器碗の口縁部片である。釉調は乳白色を呈し、胎土は乳灰色である。江戸後期。

まとめ



第19図 柱穴・包含層・地点不明 出土遺物実測図

4. まとめ

調査では、弥生時代から中世の遺構や遺物を確認した。弥生時代では堅穴住居や溝、土坑を検出した。S B001は推定直径5 mを超える円形堅穴住居で、方形の張出部が付設されている。張出部をもつ住居の検出事例は、松山大学構内遺跡3次調査検出のS B15がある。S B15は推定直径6 mを超える円形住居で、長方形の張出部が付設されている。住居内からは弥生時代末に時期比定される土器のほか、赤色顔料が付着した石杵なども出土している。住居の規模や平面形態、出土遺物など、S B001とS B15は類似点が非常に多い。このほか、S B001は周壁溝が二重に巡ることなどから、改築が施された住居といえる。また、住居底面には貼床が施され、貼床直上からは数多くの弥生土器のほかに炭化材が出土したことから、S B001は焼失住居の可能性がある。

このほか、SB001に先行する2条の溝を検出した。SD001と002は平行に走る溝で、溝埋土中には砂が含まれていることから流水があったことが伺われる。溝の性格は不明であるが、出土遺物より両溝の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。また、SD001に後出する2基の土坑を検出した。SK001・002は、壁面に筒状を呈する箇所がみられることから、貯蔵穴の可能性のある土坑である。

中世では、掘立柱建物や土坑、柱穴を検出した。掘立101や102は1間×1間程度の小規模な建物であるが、柱穴内から時期を特定しうる遺物の出土がなく、構築時期は不明である。ただし、周辺での調査成果などから、概ね中世段階の建物と考えられる。

調査ではAT火山灰層を含む土層（第Ⅷ層）を確認した。隣接する東本遺跡4次調査ではAT火山灰の1次の堆積と2次の堆積が確認されているが、本調査検出の火山灰には砂粒や水の影響がみられることから、第Ⅷ層は2次堆積層と思われる。

今回の調査により、東本地区で確認されている弥生時代後期集落が調査地のある東側地域にまで広がりをみせていることがわかった。その一方で、中世集落の存在が確認されたことは、桑原地区における中世の集落範囲を知るうえで貴重な資料を得ることができたといえよう。

【参考文献】

宮内慎一 1995 「松山大学構内遺跡3次調査」松山市文化財調査報告書第49集

遺構・遺物一覧 一凡例一

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、頸→頸部、肩→肩部、胴→胴部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウソモ、密→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表5 竪穴住居一覧

竪穴 (SB)	地 区	平面形	規 模 (m)		埋 土	内部施設	出土遺物	時 期	備 考	
			長さ(長径)×幅(短径)×深さ							
001	C1・2	円形	(5.30)×(1.24)×0.38		黒色シルト (暗褐色粘土混)	他	船床	弥生・石	弥生末	SD001・002を 切る

表6 掘立柱建物一覧

竪立	地 区	規模 (間)	方位	桁行長 (m)	梁行長 (m)	柱穴埋土	出土遺物	時 期	備 考
001	B3~C4	1×1	東西	2.66	2.60	黒褐色シルト (暗褐色粘土混)	弥生	弥生末以降	
101	B3~C4	1×1	東西	2.06	1.98	暗灰黄色砂質シルト (黒色シルト混)	弥生・土師	中世	
102	A・B3	1×(1)	南北	2.26	(1.21)	暗灰黄色砂質シルト (黒色シルト混)	弥生・土師	中世	

表7 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m)	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
001	A2~C2	レンズ状	7.98×1.26×0.15	北東-南西	黒褐色砂 (暗褐色粘土混)	弥生	弥生後期後葉	SB001に切られる
002	A3~C2	レンズ状	8.94×1.38×0.20	北東-南西	黒褐色砂 (暗褐色粘土混)	弥生	弥生後期後葉	SB001に切られる
003	B4	皿状	0.98×0.32×0.06	東-西	黒褐色シルト	弥生	弥生後期	
004	A3	皿状	0.68×0.20×0.06	南-北	黒褐色シルト	弥生	弥生後期	

表8 土坑一覧

土坑	地 区	平面形	断面形	規 模 (m)		埋 土	出土遺物	時 期	備 考
				長さ(長径)×幅(短径)×深さ					
001	A・B2	楕円形	逆台形状	1.54×1.26×0.66		黒褐色砂 他	—	弥生後期後葉 以降	SD001を切る
002	B2	楕円形	逆台形状	1.68×1.26×0.60		黒褐色砂 他	—	弥生後期後葉 以降	SD001を切る
101	A4	不整形	逆台形状	0.86×0.84×0.14		暗灰黄色砂質シルト (黒色シルト混)	—	中世	SP143に切ら れる

表9 柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 (m)		埋 土	出土遺物	備 考
			長さ(長径)×幅(短径)×深さ				
001	C3	円形	0.58×0.54×0.18		黒褐色シルト(暗褐色粘土混入)	弥生	掘立001
002	C3	楕円形	0.26×0.22×0.11		黒色シルト		
003	C3	楕円形	0.32×0.24×0.11		黒色シルト		
004	C3	円形	0.56×0.50×0.11		黒褐色シルト		
005	C4	楕円形	0.52×0.30×0.06		黒褐色シルト		
006	A・B3	円形	0.32×0.28×0.12		黒色シルト		
007	B3	楕円形	0.38×0.26×0.25		黒色シルト		
008	B3	楕円形	0.32×0.30×0.30		黒色シルト		
009	B3	円形	0.18×0.18×0.24		黒色シルト		
010	B3	楕円形	0.40×0.34×0.08		黒褐色シルト(暗褐色粘土混入)		掘立001
011	B3	円形	0.22×0.20×0.09		黒色シルト		
012	B3	円形	0.34×0.32×0.06		黒褐色シルト		
013	C4	円形	0.46×(0.40)×0.08		黒色シルト		

柱穴一覧

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 (m)		埋土	出土遺物	備考
			長さ(長径)×幅(短径)×深さ				
014	B・C4	円形	0.20×0.20×0.10		黒色シルト		
015	B4	円形	0.26×0.26×0.30		黒色シルト		
016	B4	楕円形	0.40×0.38×0.12		黒褐色シルト(暗褐色粘土混入)	弥生	掘立001
017	B4	円形	0.22×0.22×0.08		黒色シルト		
018	B3・4	(円形)	(0.48)×(0.21)×0.07		黒褐色シルト(暗褐色粘土混入)		掘立001
019	B4	楕円形	0.50×0.32×0.13		黒色シルト		
020	B3	楕円形	0.38×0.22×0.09		黒色シルト		
021	C3	不整形円形	0.26×0.22×0.06		黒色シルト		
022	B2	楕円形	0.34×0.24×0.20		黒色シルト		
023	A1	楕円形	0.46×0.32×0.18		黒色シルト		
024	A1	円形	0.30×0.30×0.11		黒色シルト		
025	A1・2	(円形)	(0.42)×(0.15)×0.07		黒色シルト		
026	C3	(円形)	(0.20)×(0.08)×0.07		黒色シルト		
027	C2・3	(円形)	(0.24)×(0.08)×0.12		黒色シルト		
028	B2	円形	0.26×0.24×0.40		黒褐色シルト		SD001底面にて 検出
029	B2	円形	0.20×0.18×0.10		黒褐色シルト		SD002底面にて 検出
030	B2	円形	0.20×0.20×0.28		黒色シルト		SD001を切る
031	B4	円形	(0.20)×(0.10)×0.06		黒色シルト		
032	A3・4	(円形)	(0.44)×(0.18)×0.11		黒色シルト		
033	C4	(円形)	(0.20)×(0.18)×0.06		黒色シルト		
034	C4	円形	0.32×0.30×0.12		黒色シルト		
035	B・C2	円形	0.72×0.68×0.11		黒色シルト		SD001を切る
101	C2	楕円形	0.44×0.40×0.32		暗灰黄色シルト		
102	C2	円形	0.20×0.19×0.20		暗灰黄色シルト		
103	C2	不整形円形	0.35×0.28×0.14		暗灰黄色シルト		
104	C3	円形	0.26×0.25×0.16		暗灰黄色シルト		
105	C3	円形	0.24×0.24×0.09		暗灰黄色シルト(黒色シルト混入)		掘立101
106	C4	円形	0.26×0.20×0.19		暗灰黄色シルト(黒色シルト混入)	弥生・土師	掘立101
107	C3	円形	0.20×0.20×0.10		暗灰黄色シルト		
108	C4	円形	0.21×0.20×0.17		暗灰黄色シルト		
109	C4	楕円形	0.31×0.26×0.16		暗灰黄色シルト		

遺構一覧

(3)

柱穴一覧

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 (m)		埋土	出土遺物	備考
			長さ(長さ)×幅(短径)×深さ				
110	C2	円形	0.21×0.20×0.23		磁灰黄色シルト		
111	B3	円形	0.30×0.28×0.14		磁灰黄色シルト	弥生	
112	B2	円形	0.26×0.26×0.11		磁灰黄色シルト		
113	B2	円形	0.26×0.23×0.10		磁灰黄色シルト		
114	B・C4	円形	0.26×0.24×0.20		磁灰黄色シルト		
115	B4	楕円形	0.36×0.27×0.22		磁灰黄色シルト(黒色シルト混入)		竪立101
116	B3	楕円形	0.40×0.28×0.10		磁灰黄色シルト(黒色シルト混入)		竪立101
117	B3	円形	0.14×0.11×0.19		磁灰黄色シルト		
118	B4	円形	0.18×0.18×0.40		磁灰黄色シルト		
119	A3	円形	0.18×0.17×0.36		磁灰黄色シルト		
120	A3	円形	0.20×0.19×0.46		磁灰黄色シルト		
121	B3	円形	0.20×0.20×0.11		磁灰黄色シルト		
122	B3	楕円形	0.28×0.20×0.40		磁灰黄色シルト		
123	B3	円形	0.18×0.17×0.36		磁灰黄色シルト		
124	A3	円形	0.24×0.22×0.22		磁灰黄色シルト(黒色シルト混入)	弥生・土師	竪立102
125	A・B3	円形	0.22×0.22×0.37		磁灰黄色シルト		
126	A3	楕円形	0.22×1.40×0.05		磁灰黄色シルト		
127	A3	円形	0.19×0.19×0.13		磁灰黄色シルト		
128	A3	円形	0.26×0.26×0.12		磁灰黄色シルト(黒色シルト混入)		竪立102
129	C2	円形	0.21×0.20×0.30		磁灰黄色シルト		
130	B2	円形	0.12×0.10×0.06		磁灰黄色シルト		
131	B2	円形	0.21×0.16×0.05		磁灰黄色シルト		
132	B2	円形	0.13×0.12×0.06		磁灰黄色シルト		
133	B2	円形	0.14×0.13×0.04		磁灰黄色シルト		
134	B2	円形	0.15×0.14×0.07		磁灰黄色シルト		
135	A2	円形	0.18×0.18×0.07		磁灰黄色シルト(黒色シルト混入)		
136	A2	円形	0.26×0.26×0.07		磁灰黄色シルト		
137	A2	円形	0.20×0.18×0.06		磁灰黄色シルト		
138	A3	楕円形	0.35×0.25×0.11		磁灰黄色シルト(黒色シルト混入)		竪立102
139	A3	円形	0.18×(0.16)×0.09		磁灰黄色シルト		
140	B3	(円形)	(0.21)×(0.12)×0.05		磁灰黄色シルト		

柱六一覧

(4)

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	備考
141	A3	円形	0.21×0.20×0.05	曜灰黄色シルト		
142	B4	円形	0.26×0.24×0.41	曜灰黄色シルト		
143	A4	円形	0.20×0.18×0.21	曜灰黄色シルト		SK101を切る
144	A2・3	円形	0.18×0.18×0.07	曜灰黄色シルト(黒色シルト混入)		
145	A2・3	円形	0.22×(0.12)×0.05	曜灰黄色シルト		
146	B1	円形	0.14×0.14×0.09	曜灰黄色シルト		
147	A・B3	楕円形	0.32×0.26×0.10	曜灰黄色シルト(黒色シルト混入)		竪立102
148	A3・4	円形	0.12×0.12×0.05	曜灰黄色シルト		
149	B2	楕円形	0.14×0.10×0.06	曜灰黄色シルト		

表10 SB001出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・絶文	調査		色調(外面) 内面	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径(18.8) 残高 4.0	「く」の字状口縁。 口縁部はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石炭(1~9)金 ◎		
2	甕	口径(16.6) 残高 5.1	「く」の字状口縁。 口縁部は「コ」字状。	◎ヨコナデ ◎ハク(10本/cm)	茶褐色 ◎ハク→ナデ	褐色 褐色	石炭(1~4)金 ◎	9	
3	甕	口径(15.2) 残高 3.9	「く」の字状口縁。 口縁部は「コ」字状。	◎ヨコナデ ◎ハク→ヨコナデ	ハク(4~6本/cm) →ナデ	淡褐色 淡褐色	石炭(1~2)金 ◎	9	
4	甕	口径(22.7) 残高 3.1	「く」の字状口縁。 口縁部は「コ」字状。小片。	ヨコナデ	ハク→ナデ	褐色 茶褐色	石炭(1~3)金 ◎		
5	甕	口径(23.0) 残高 3.5	外反口縁。口縁部は丸い。	ヨコナデ	ハク	淡褐色 淡褐色	石炭(1~2)金 ◎	煤付層	
6	甕	残高 6.7	外反口縁。口縁部は欠損。	ミガキ	ナデ(指頭)	黒褐色 褐色	石炭(1)	黒炭	9
7	甕	底径(3.6) 残高 6.9	平底。	タタキ ハク(7本/cm)	ナデ	褐色 褐色	石炭(1~2)	黒炭	9
8	甕	底径 4.0 残高 6.2	やや突出する平底。	ハク(10本/cm)	ナデ	乳白色 灰黄褐色	石炭(1~4)金 ◎	黒炭	9
9	甕	底径(4.5) 残高 7.9	わずかに上げ底。	ハク (6~7本/cm)	ナデ	黄褐色 淡褐色	石炭(1~4)金 ◎		
10	甕	底径 4.1 残高 4.6	わずかに上げ底。	ハク (10~11本/cm)	ナデ	褐色 黄褐色	石炭(1~3) ◎	黒炭	9
11	甕	口径(11.5) 残高 2.7	複合口縁部。底径波状文4条。 小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	明褐色 淡褐色	石炭(1~2)		
12	甕	口径(12.7) 残高 2.7	複合口縁部。口縁部は内傾。 小片。	ハク(9本/cm) →ナデ	ヨコナデ	褐色 乳白色	石炭(1~2)金 ◎		
13	甕	残高 3.2	長頸部の頸部片。 唇部波状文12条以上。	ミガキ→ナデ	ハク→ナデ	褐色 淡褐色	石炭(1~2)金 ◎		
14	甕	残高 3.3	へう増きによる線刻あり (線画か?)。小片。	ハク→ナデ	ハク→ナデ	褐色 淡褐色	石炭(1~2)金 ◎	9	
15	甕	残高 4.5	へう増きによる3条の線刻あり。 小片。	ハク (3~5本/cm)	ハク(5本/cm) →ナデ	褐色 黒褐色	石炭(1~3) ◎	黒炭	9
16	甕	底径(6.9) 残高 3.3	わずかに突出する平底。	ナデ	ナデ	黒色 灰白色	石炭(1~2)金 ◎	黒炭	
17	甕	底径(5.0) 残高 4.6	磨みのある平底。	ハク(11本/cm)	ナデ	赤褐色 褐色	石炭(1~3)金 ◎	黒炭	9
18	甕	底径(3.4) 残高 2.6	平底。	ハク (10~11本/cm)	ナデ	褐色 褐灰色	石炭(1~4)金 ◎	黒炭	9
19	鉢	口径(25.2) 残高 4.4	大型器。口縁部はナデ凹む。 小片。	ハク(8本/cm) →ナデ	ヨコナデ (一部ハク)	灰褐色 褐色	石炭(1~2)金 ◎	黒炭	9
20	鉢	底径 4.6 残高 5.6	外反口縁。底部は平底。 1/2の残存。	ハク(6本/cm)	ハク(7本/cm)	乳白色 乳白色	石炭(1~3)金 ◎	黒炭	9
21	鉢	底径(8.5) 残高 2.2	煤付鉢。脚部は「コ」字状。	ハク→ナデ	ハク	褐色 褐色	石炭(1~3)金 ◎	黒炭	

SB001出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・器文	調整		色調(外面/内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
22	鉢	底径(14.4) 残高 2.0	脚付鉢。脚部部に彫刻文15条七 円孔(φ0.8cm)2ヶ着取。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石長(1~3)金 ◎		10
23	鉢	底径(3.7) 残高 2.1	上げ底。底部外面に指頭痕顕著。	ナデ	ナデ	褐色 橙褐色	石長(1) ◎		
24	鉢	底径 2.2 残高 1.5	ボタン状に突出する上げ底の底部。	ミガキ	ハク(5本/cm)	黒褐色 黒褐色	長(1)金 ◎		
25	高坏	口径(23.6) 残高 3.0	外反口縁。口縁縁部はナデ凹む。	ミガキ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	石長(1~2)金 ◎	黒斑	10
26	高坏	残高 3.0	坏部小片。	ミガキ	ミガキ	黄灰色 褐色	長(1~2)金 ◎		10
27	高坏	残高 10.7	円筒状の柱部。1/2の残存。	(径上)ハク(7本/cm) (径下)ミガキ	ナデ (シボリ肌)	褐色 褐色	石長(1~4)金 ◎		
28	高坏	残高 1.0	脚部小片。半截竹管文4ヶ着取。 小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石長(1) ◎		10
29	支脚	残高 6.4	角状突起部。断面円形。	ナデ	ナデ	黄褐色	石長(1~3)金 ◎		10
30	罍	口径(20.6) 残高 4.1	「く」の字状口縁。口縁縁部は 「こ」字状。小片。	ハク (5~7本/cm)	ハク (5~7本/cm)	黄褐色 褐色	石長(1~3) ◎	張出部	
31	罍	残高 4.4	壺口蓋の縁部小片。	ハク(10本/cm)	罍ハク(10本/cm) ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石長(1~2)金 ◎	張出部	
32	罍	残高 4.2	壺口蓋の縁部小片。	ミガキ	ハク (7~8本/cm)	褐色 灰褐色	◎	張出部	10
33	罍	残高 2.1	凸帯上に刻目。	ナデ	マメツ	黄灰色 黄灰色	石長(1~3) ◎	張出部	
34	鉢	残高 2.2	脚付鉢。小片。	ミガキ	ミガキ	褐色 黒色	石長(1~4) ◎	張出部 黒斑	
35	罍	底径(3.0) 残高 3.7	平底。1/2の残存。	ナデ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石長(1~3)金 ◎	張出部	
36	罍	底径(4.6) 残高 4.1	突出する平底。	ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石長(1~5)金 ◎	張出部	
37	罍	底径 4.8 残高 3.0	平底。1/3の残存。	ハクミガキ	ハク(4本/cm)	褐色 褐色	石長(1~3)金 ◎	張出部 黒斑	

表11 掘立001出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・器文	調整		色調(外面/内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
38	鉢	口径(22.0) 残高 6.7	壺口縁。口縁縁部は「こ」字状。	タタキ	ハク (9~10本/cm)	褐色 褐色	石長(1~3)金 ◎	SP001 黒斑	10
39	支脚	残高 5.5	柱部片。1/4の残存。	ハク(10本/cm)	ハク	褐色 褐色	石長(1~5) ◎	SP106	10

表12 SD出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・器文	調整		色調(外面/内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
40	高坏	残高 1.8	坏部小片。	ミガキ	マメツ	黄褐色 黄褐色	◎	SD001	
41	罍	残高 3.3	小片。	ナデ ハク(6~7本/cm)	ナデ	褐色 褐色	石長(1~3) ◎	SD001 黒斑	
42	罍	底径(10.1) 残高 3.8	平底。	ミガキ	ナデ	黄褐色 黒褐色	石長(1~4)金 ◎	SD001	
43	罍	底径(3.1) 残高 2.0	平底。	ナデ	ナデ	褐色 黄灰色	石長(1~2)金 ◎	SD002	
44	罍	底径(5.2) 残高 2.9	平底。小片	ハク(8本/cm)	ナデ	褐色 黒褐色	石長(1~4) ◎	SD002	
45	罍	残高 2.4	脚部小片。	マメツ	ナデ(ハク)	乳黄色 乳黄色	◎	SD003	
46	罍	口径(17.4) 残高 2.6	外反口縁。口縁縁部はナデ凹む。	ミガキ	マメツ	黄褐色 黒褐色	石(1) ◎	SD004	

表 13 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	製 法		色調(外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
47	ハクツ器 土器	底径(11.3) 残高 1.5	平底。	ココナテ	ナテ	乳褐色 橙褐色	石長(1~3)重 ◎	SP034	10
48	甕	底径 3.2 残高 3.3	小さな平底。	ハク・タタキ	ナテ	灰黄色 灰褐色	石長(1~5) ◎	SP111	

表 14 包舎層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	製 法		色調(外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
49	蓋	残高 3.5	胴部片。 へら状工具による「X」字状の線刻。	ハク (5~6本/cm)	ハク (3~4本/cm)	乳褐色 乳褐色	密 ◎	黒斑	
50	蓋	残高 3.1	胴部片。 へら状工具による縦線文あり。	ハク	ミガキ・ハク	褐色 褐色	長(1) ◎		
51	高環	残高 2.2	環部小片。環部下に段あり。	ハク	ハク	褐色 褐色	長(1)重 ◎		
52	支脚	底径(4.8) 残高 5.9	中空。	ナテ	ナテ	褐色 灰褐色	石長(1~3)重 ◎		

表 15 包舎層出土遺物観察表 鉄製品

部号	器種	残存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
53	鉄滓		鉄	5.5	4.4	1.8	45.8		10

表 16 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	製 法		色調(外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
54	甕	残高 3.4	胴部片。	タタキ→ ハク(5本/cm)	ナテ	黒褐色 灰褐色	石長(1~3)重 ◎		
55	甕	残高 3.2	胴部片。頸部處外面に工具痕。	ハク (7~10本/cm)	ハク(5本/cm)	橙褐色 褐色	石長(1~2)重 ◎		
56	高環	残高 2.2	環部片。口縁部はハクリ。	マメツ	マメツ	灰褐色 橙褐色	石長(1~2) ○		
57	甕	底径(4.2) 残高 3.6	平底。	ハク→タタキ	ハク (6~10本/cm)	赤褐色 黒褐色	石長(1~4)重 ◎		
58	甕	底径(6.8) 残高 3.5	わずかに突出する平底。 赤色酸化土粒含む。	ハク(6本/cm)	ハク(6本/cm)	褐色 茶褐色	石長(1~3) ◎		
59	甕	残高 1.4	肥前系。小片。胎土は乳灰色。 釉薬は乳白色を呈する。	胎釉	胎釉	乳灰色	密 ◎	胎土： 乳灰色	

第3章

束本遺跡8次調査

第3章 東本遺跡8次調査

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

2006(平成18)年7月18日、梅原秀雄氏より松山市東本1丁目116番6地内における個人もしくは専用住宅建築に伴う埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)に提出された。

確認願が提出された申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.83枝松遺物包含地』内にあたる。周辺では松山東部環状線道路建設工事に伴い実施した東本遺跡4次調査をはじめ、数々の発掘調査が実施され、弥生時代後期集落が広く展開していることが近年の調査・研究の結果、明らかになっている。これらのことから、文化財課と申請者は協議を行い、申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施することになった。試掘調査は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)が主体となり、2006(平成18)年7月26日に実施した。調査の結果、土坑や柱穴のほか、弥生土器を含む遺物包含層を検出した。

これらの結果を受け、文化財課と申請者及び埋文センターの三者は協議を重ね、住宅建築に伴い消失する遺跡に対して記録保存のために発掘調査を実施することになった。発掘調査は国庫補助事業として文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり、申請地を含む周辺地域における弥生時代集落の広がりや構造解明を主目的とし、2006(平成18)年10月2日より開始した。

(2) 調査の経緯

発掘調査は申請者の協力のもと、調査地北側隣接地を廃土置き場として使用した。平成18年10月2日より重機(バックホー0.25m³)とダンプカーを使用し、表土の掘削と廃土移動を行った。10月3日、第V層オリープ黒色シルトまでを重機にて掘削したが、調査地西半部からは弥生土器片が比較的まとまって出土したことから、西半部は第V層上面にて掘削を終了した。一方、調査地東半部では遺物の出土が見られなかったことから、重機にて第V層をすべて掘削した。10月4日、作業員により調査地西半部の遺構検出作業を行う。土層観察と平面精査により、第VI層上面にて堅穴住居や溝、土坑、柱穴を検出する。10月6日、東半部の遺構検出作業をし、土坑1基を検出する。10月10日、遺構検出状況写真を撮影後、検出した遺構の掘り下げを開始する。まず、溝の掘り下げと柱穴の半截をし、その後、堅穴住居の調査を行う。10月13日、南海測量設計株式会社に基準点測量業務を委託し、調査地内に4級基準点4点を設置する。10月25日、すべての遺構の掘り下げ、及び測量作業を終了し、10月26日、遺構完掘状況写真を撮影する。10月27日、発掘用具を撤去し、10月30日と31日の2日間で、重機の使用による埋戻し作業をし、発掘調査を終了する。

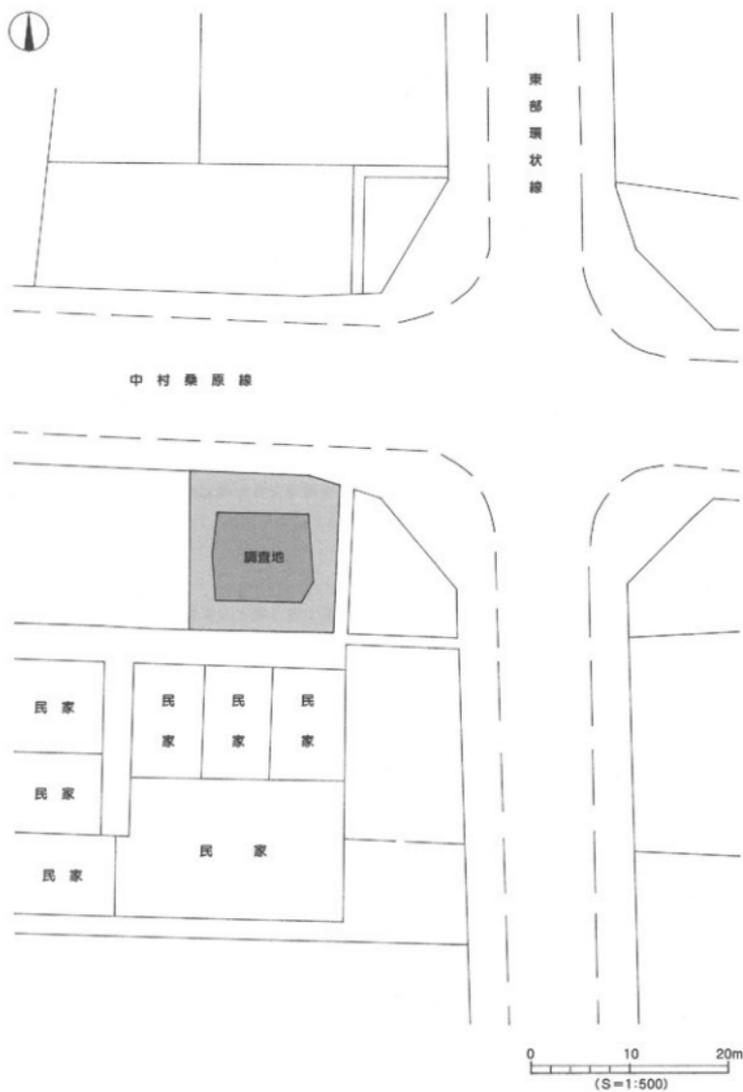
(3) 調査組織

所在地:松山市東本1丁目116番6

調査期間:2006(平成18)年10月2日~同年10月31日

調査面積:176.05m²

土地所有者:梅原 秀雄



第20図 調査地測量図

調査主体：松山市教育委員会、〔委託〕財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：松山市教育委員会文化財課 栗田 正芳

財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター調査担当 宮内 慎一

2. 層位

(1) 基本層位 (第22・23図、図版11)

調査地は松山平野北東部、石手川の氾濫に起因する扇状地上、標高34.4mに立地する。調査以前は、既存宅地であった。調査地の基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層浅黄色砂質シルト、第Ⅲ層黄色粘質シルト、第Ⅳ層暗灰黄色砂質シルト、第Ⅴ層オリブ黒色シルト、第Ⅵ層黒褐色粘質シルト、第Ⅶ層暗褐色粘質土、第Ⅷ層褐色粘質シルト、第Ⅸ層褐色粘質土、第Ⅹ層暗褐色粘質土（火山灰がブロック状に混入）である。なお、第Ⅶ層以下は調査地壁沿いに設定したトレンチにより確認した土層である。

第Ⅰ層：近現代の造成、及び農耕に伴う耕土で、土色・土質の違いにより4層に分層される。

第Ⅰ①層－造成土で、地表下5～25cmまで開発が行われている。

第Ⅰ②層－青灰色（5BG6/1）を呈する粘質土で、農耕に伴う耕作土である。調査地全域にみられ、層厚8～16cmを測る。

第Ⅰ③層－黄色（25Y7/8）を呈する粘質土で、農耕に伴う床土である。調査地北西部にみられ、層厚2～10cmを測る。

第Ⅰ④層－黄色（5Y7/6）を呈する粘質土で、農耕に伴う旧床土である。調査地南西部にみられ、層厚2～6cmを測る。

第Ⅱ層：浅黄色（5Y7/4）を呈する砂質シルトで調査地南西部にみられ、層厚2～10cmを測る。

第Ⅲ層：黄色（25Y8/8）を呈する粘質シルトで調査地全域にみられ、層厚4～15cmを測る。なお、第Ⅲ層下面には凹凸が数箇所にみられることから、これらは遺構の可能性が高いものである。

第Ⅳ層：暗灰黄色（25Y5/2）を呈する砂質シルトで調査地南西部にみられ、層厚2～10cmを測る。重機掘削時に、本層中より少量の土師器片が出土した。

第Ⅴ層：オリブ黒色（10Y3/1）を呈するシルト層で調査地全域にみられ、層厚5～20cmを測る。本層中からは、弥生土器片が出土した。

第Ⅵ層：黒褐色（25Y3/1）を呈する粘質シルト層で調査地全域にみられ、層厚5～30cmを測る。本層上面は、調査における遺構検出面である。

第Ⅶ層：暗褐色（10YR3/3）を呈する粘質土で粘性が強く、層厚6～22cmを測る。

第Ⅷ層：褐色（10YR4/6）を呈する粘質シルトで、層厚6～28cmを測る。なお、調査地北東部壁面の土層観察により、第Ⅶ層以下の土層が盛り上がる箇所がみられる。

第Ⅸ層：褐色（10YR4/4）を呈する粘質土で粘性が強く、層厚4～15cm以上を測る。

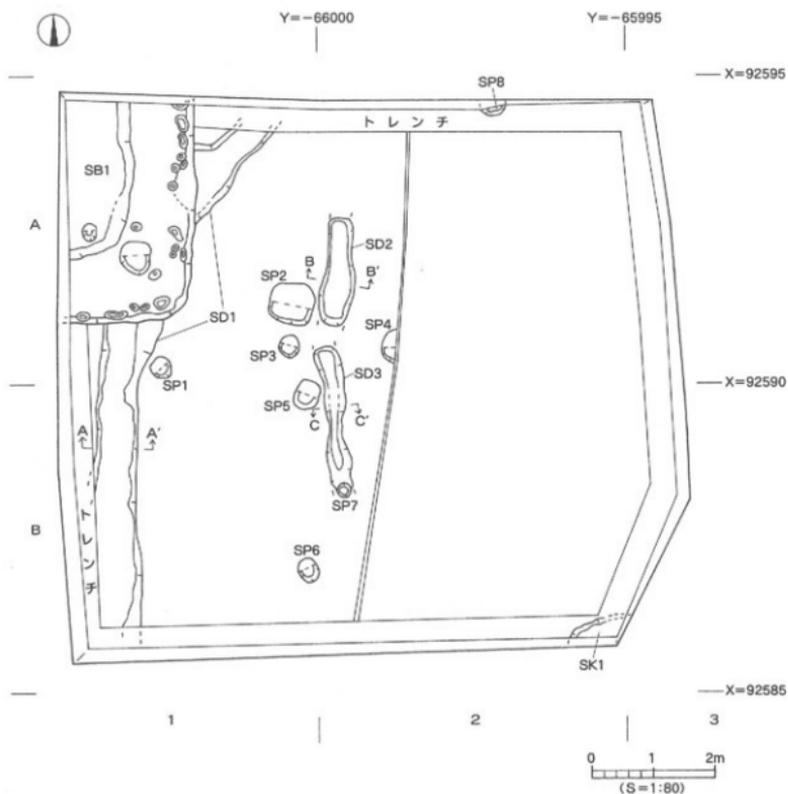
第Ⅹ層：暗褐色（10YR3/4）を呈する粘質土に火山灰がブロック状に混入する土層で、層厚は最大で50cm以上を測る。なお、火山灰ブロックは、径5～20cmを測る。

(2) 検出遺構・遺物 (第21図)

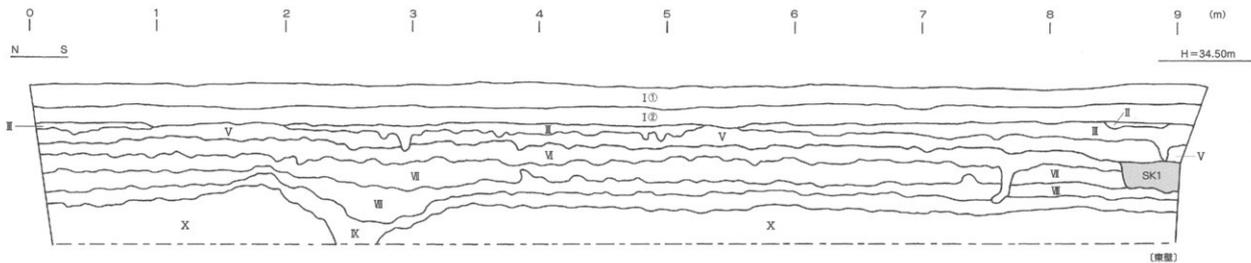
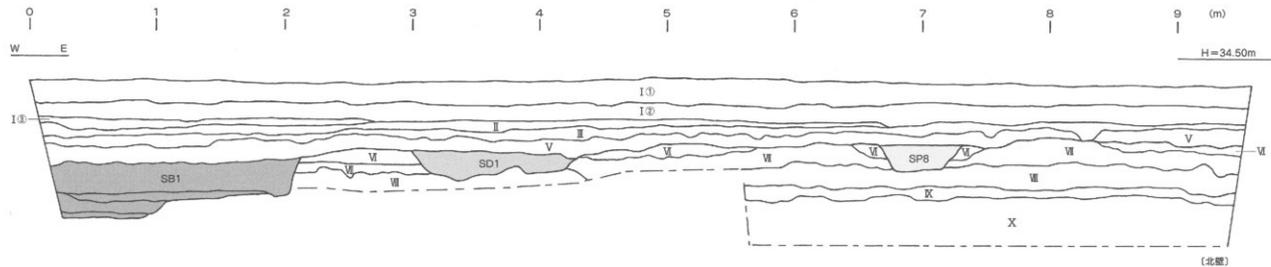
調査では堅穴住居1棟、溝3条、土坑1基、柱穴8基を確認した。すべて、第Ⅶ層上面での検出である。柱穴を除き、検出した遺構は弥生時代後期後葉から末に時期比定されるものである。

遺物は遺構及び包含層中より、弥生土器（後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳）、石が出土した。遺物の出土量は取納箱（44×60×14cm）6箱分である。

なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へ向けてA・B、西から東へ1・2・3とし、A1・A2・・・C3といったグリッド名を付した。グリッドは、遺物の取り上げや遺構の位置表示に利用した。



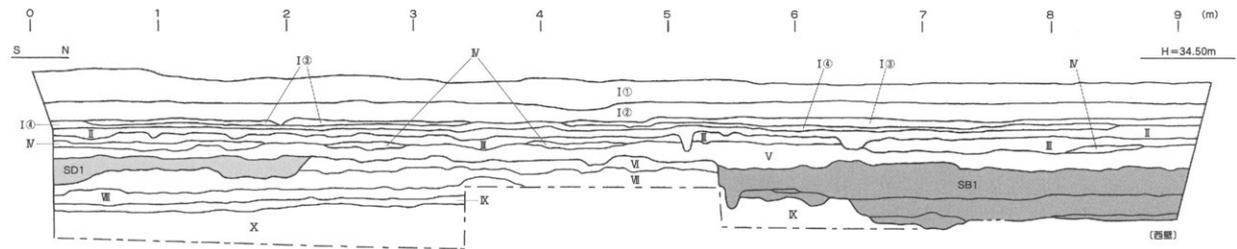
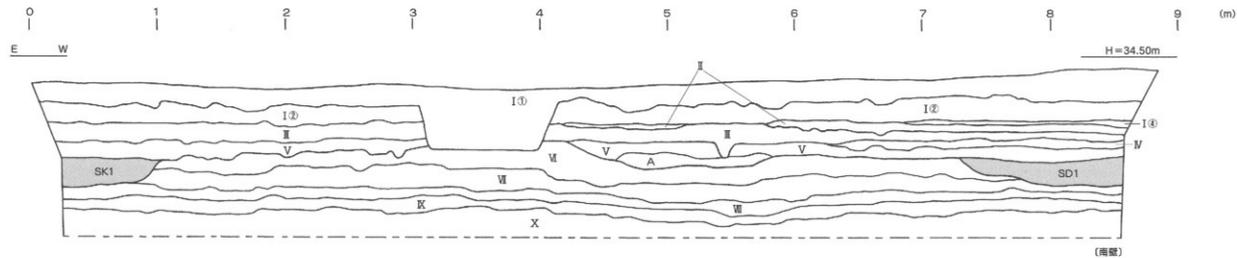
第21図 遺構配置図



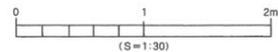
- | | | |
|-------------------|----------------------|-----------------------------------|
| I① 造灰土 | II 黄色(2.5Y8/8)粘質シルト | VII 褐色(10YR4/6)粘質シルト |
| I② 青灰色(5B6/1)粘質土 | V オリーブ灰色(10Y3/1)シルト | K 褐色(10YR4/4)粘質土 |
| I③ 黄色(2.5Y7/8)粘質土 | VI 黒褐色(2.5Y3/1)粘質シルト | X 褐色(10YR3/4)粘質土に
*山灰がフロック状に混入 |
| I 淡黄色(5Y7/4)粘質シルト | IV 暗褐色(10YR3/3)粘質土 | |



第22図 北壁・東壁土層図



- | | | |
|-------------------|-----------------------|------------------------------------|
| I① 造成土 | II 黄色(2.5Y8/8)粘質シルト | VI 褐色(10YR4/6)粘質シルト |
| I② 黄灰色(5BG6/1)粘質土 | IV 黄灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト | K 褐色(10YR4/4)粘質土 |
| I③ 黄色(2.5Y7/8)粘質土 | V オリーブ黄色(10Y3/1)シルト | X 黄褐色(10YR3/4)粘質土に
火山灰がブロック状に混入 |
| I④ 黄色(5Y7/6)粘質土 | III 黄褐色(2.5Y3/1)粘質シルト | A 黑色(7.5YR2/1)粘質シルト |
| I 浅黄色(5Y7/4)砂質シルト | VI 暗褐色(10YR3/3)粘質土 | |



第23図 南壁・西壁土層図

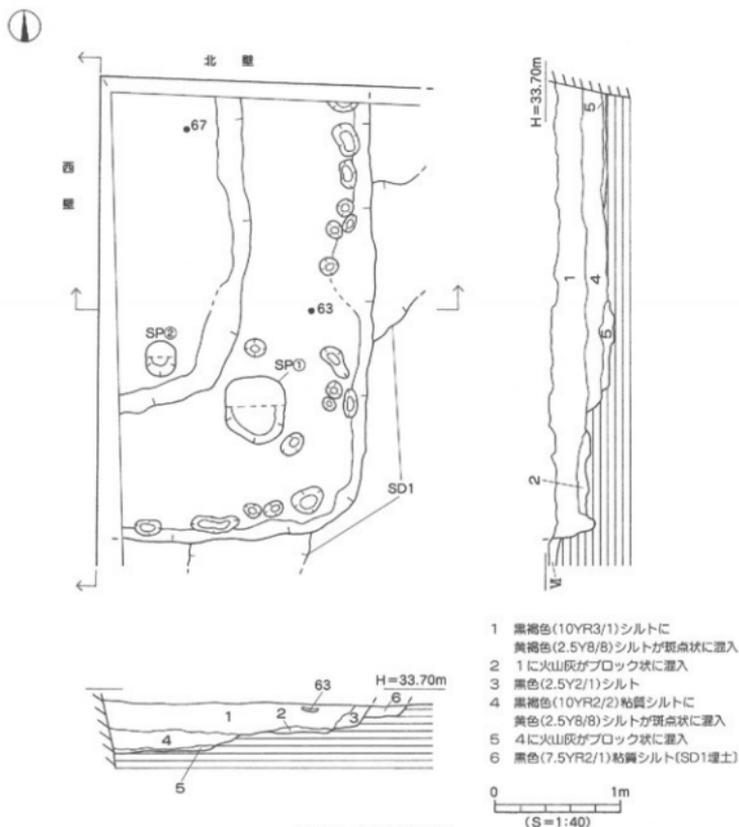
3. 遺構と遺物

調査では竪穴住居1棟、溝3条、土坑1基、柱穴8基を検出した。

(1) 竪穴住居

SB1 (第21・24図、図版13)

調査地北西部A1区に位置する。第VI層上面での検出であり、第V層が住居上面を覆う。住居東側及び南側は溝SD1を切り、北側及び西側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.10m、南北検出長3.64m、壁高は検出面下40cmを測る。内部施設はベッド状施設(高床部)を検出した。ベッドは地山削り出しによって構築されており、規模は上場幅0.7~1.1m、下場幅1.1~1.3m、高さは15~20cmを測る。



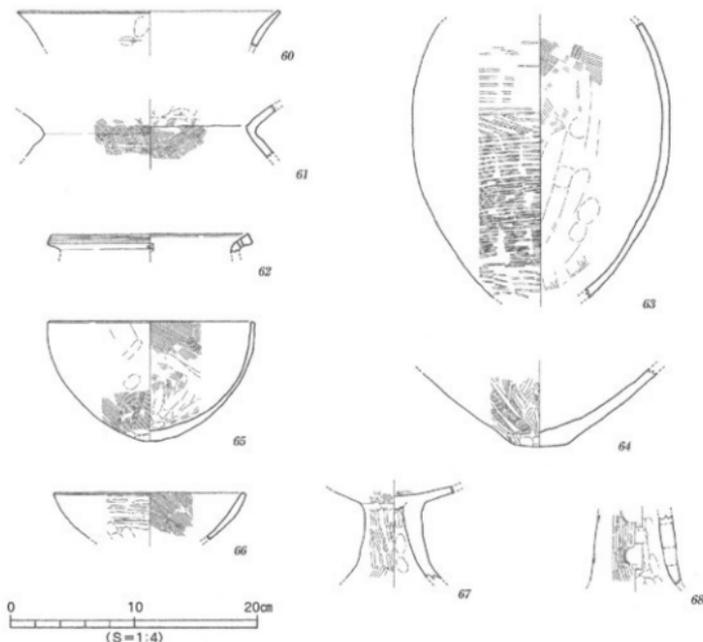
第24図 SB1 測量図

- 1 黒褐色(10YR3/1)シルトに
黄褐色(2.5Y8/8)シルトが斑点状に混入
- 2 1に火山灰がブロック状に混入
- 3 黒色(2.5Y2/1)シルト
- 4 黒褐色(10YR2/2)粘質シルトに
黄色(2.5Y8/8)シルトが斑点状に混入
- 5 4に火山灰がブロック状に混入
- 6 黒色(7.5YR2/1)粘質シルト(SD1埋土)

住居埋土は三層に分層され、住居上位は1層黒褐色シルト（黄褐色シルトが斑点状に混入）、住居東側壁体中央部付近は3層黒色シルト、住居床面付近は4層黒褐色粘質シルト（黄色シルトが斑点状に混入）である。なお、ベッド床面には2層（1層に火山灰がブロック状に混入）、住居床面では5層（4層に火山灰がブロック状に混入）が2～5cm程度堆積しており、両層は床面修復に伴う貼床土と考えられる。また、ベッド上面にて柱穴1基（SP①）、住居床面からは柱穴1基（SP②）を検出した。SP①は径0.48～0.52m、深さ16cmを測る円形柱穴で、柱穴掘り方埋土は黒色粘質シルトの単一層である。SP②は径0.23～0.26m、深さ11cmを測る円形柱穴で、柱穴掘り方埋土は黒色粘質シルトの単一層である。柱穴の配置から、SP②は支柱穴の可能性がある。両柱穴内からは、遺物の出土はない。

このほか、住居壁体沿いに径10～35cm、深さ2～5cmの小ピットを検出した。検出状況から、周壁杭の痕跡と推測される。ピット埋土は住居埋土1層と同様の、黒褐色シルト（黄褐色シルトが斑点状に混入）単一層である。ピット内からは、遺物の出土はない。

遺物は1層中より弥生土器の甕胴部（63）のほか、4層中より高坏脚部（67）などが出土した。



第25図 SB1 出土遺物実測図

出土遺物 (第25図・図版15)

60～63は甕形土器。60は口縁部が外反し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。61は「く」の字状口縁を呈し、頸部内面に稜をもつ。内外面共に、ハケメ調整を施す。62は口縁端部をわずかに拡張し、口縁端面に凹線文2条を施す。なお、口縁部下位に径3mm大の円孔(焼成前穿孔)を穿つ。63は胴部片で、外面にヨコ方向のタタキ調整、内面には胴部上位にハケメ調整、胴部下位にはナデ上げを施す。64は甕形土器の底部。平底で、外面はハケメ調整後、タテ方向のヘラミガキを加える。65・66は鉢形土器。65は直口口縁を呈し、口縁端部は外傾する。内外面に、一部ハケメ調整を施す。66は口縁端部を「コ」字状に仕上げ、外面にはヨコ方向のタタキ調整を施す。67・68は高坏形土器。67は坏柱部片で、柱部外面はハケメ調整後、タテ方向のヘラミガキを施す。坏脚部の接合は、充填技法による。68は柱部片で、径1.4cm大の円孔を2段4箇所に穿つ。

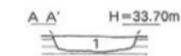
時期：出土遺物の特徴より、S B 1の廃棄・埋没時期は弥生時代末とする。

(2) 溝

SD1 (第21・26図、図版14)

調査地西側A1～B1区で検出した南北方向の溝で、溝北側はS B 1に切られ、溝両端は調査区外に続く。第VI層上面での検出であり、第V層が溝を覆う。溝壁体及び基底面は、第VI層である。規模は検出長8.3m、検出幅0.54m～0.98m、深さは検出面下16cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色粘質シルトの単一層である。溝基底面はほぼ平坦であるが、北側から南側へ向けて傾斜をなす(比高差10cm)。遺物は第V層掘り下げ時に、溝上面付近から弥生土器の甕や鉢の口縁部片(弥生後期後葉)が比較的多くまとって出土したが、これらの遺物は本来、SD1に帰属する可能性が高いものである。なお、溝掘り下げ時には少量の弥生土器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期比定しうる遺物の出土はないが、溝上面からの出土品やS B 1との切り合い等により、概ね弥生時代後期後葉の溝とする。



1 黒色(7.5YR2/1)粘質シルト



第26図 SD1 断面図

SD2 (第21・27図、図版14)

調査地中央部北寄りA2区で検出した南北方向の短い溝で、溝両端は消失する。第VI層上面での検出である。規模は検出長1.72m、検出幅0.38～0.58m、深さは検出面下16cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色粘質シルトの単一層である。溝基底面には凹凸がみられ、北側から南側に向けてわずかに傾斜をなす(比高差3cm)。なお、溝壁体及び基底面は、第VI層である。

遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを1点掲載した。

出土遺物 (第27図)

69は鉢形土器。口縁部は外反し、口縁端面はナデ凹む。内外面共に、ヨコ方向の細かなヘラミガキ調



1 黒色(7.5YR2/1)粘質シルト

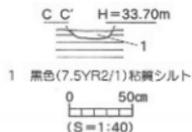
第27図 SD2 断面図・出土遺物実測図

整を施す。

時期：出土遺物の特徴から、SD2は弥生時代後期後葉とする。

SD3 (第21・28図、図版14)

調査地中央部南寄りA2～B2区で検出した南北方向の短い溝で、溝両端は消失する。第VI層上面での検出である。規模は検出長2.30m、検出幅0.20～0.42m、深さは検出面下6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色粘質シルトの単一層である。溝基底面には凹凸がみられ、北側から南側に向けて、わずかに傾斜をなす(比高差4cm)。なお、溝壁体及び基底面は第VI層である。埋土や検出状況から、SD2とSD3は同一の溝と考えられる。



第28図 SD3 断面図

遺物は埋土中より弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが埋土がSD1と酷似することから、SD3は概ね弥生時代後期後葉の溝とする。

(3) 土 坑

SK1 (第21・29図)

調査地南東隅B2・3区で検出した土坑で、土坑東側及び南側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により第VI層上面から掘削されており、第V層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は検出長0.85m、検出幅0.30m、深さは20cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒色粘質シルトの単一層である。土坑基底面はほぼ平坦で、壁体及び基底面は第VI層である。土坑内からは、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを1点掲載した。

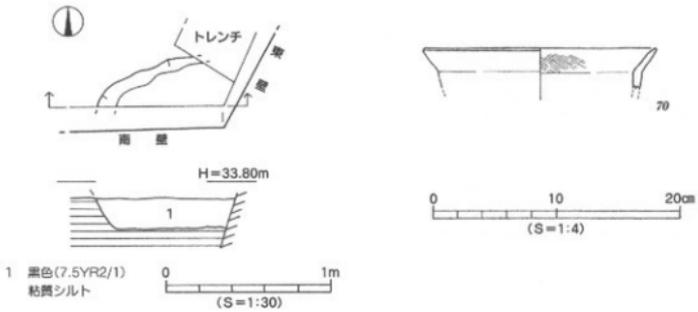
出土遺物 (第29図)

70は鉢形土器。口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。口頸部内面に稜をもつ。

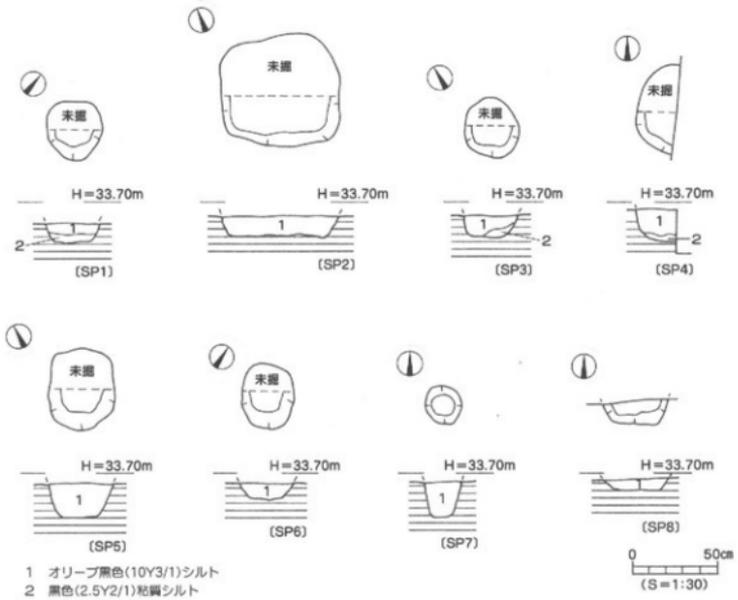
時期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、検出層位や出土遺物の特徴からSK1は弥生時代後期後葉とする。

(4) 柱 穴 (第21・30図)

調査では8基の柱穴を確認した。すべて、第VI層上面での検出である。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.16～0.74m、深さ6～22cmを測る。柱穴掘り方埋土はオリブ黒色シルトを基調とし、3基の柱穴(SP1・3・4)では柱穴下部に黒色粘質シルトが堆積する。なお、柱痕は検出されなかった。柱穴内からは少量の弥生土器片や土師器片が出土したが、図化しうるものはない。



第29図 SK1 測量図・出土遺物実測図

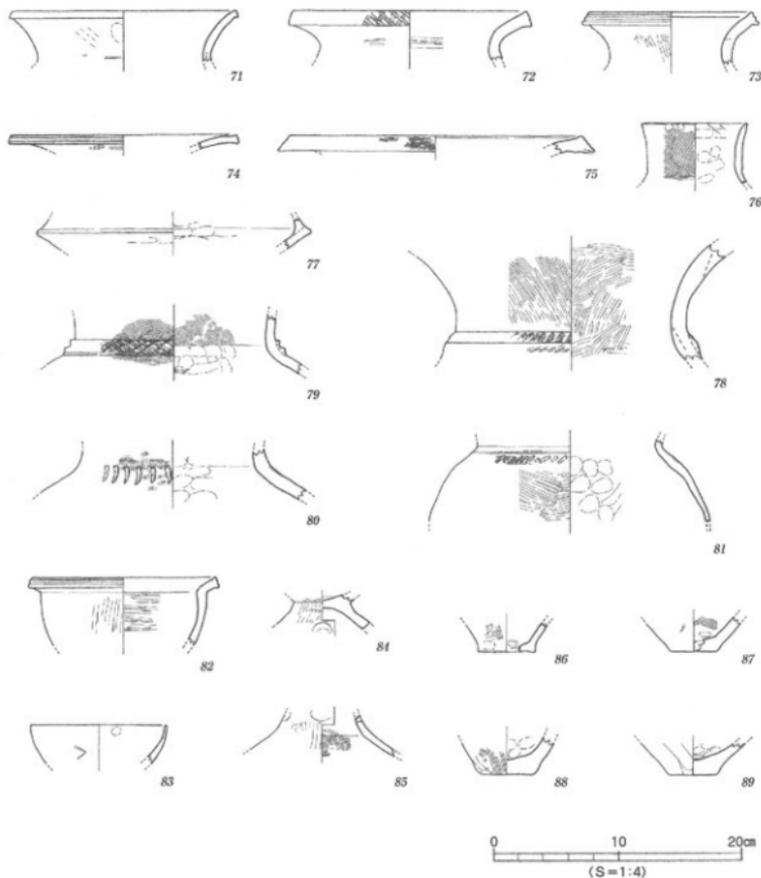


第30図 SP1~8 測量図

(5) 包含層出土遺物 (第31図、図版15)

調査では、第V層掘り下げ時に弥生土器片が出土した。遺構は第V層完掘後の第VI層上面での検出であるが、第V層として取り上げた遺物の大半は出土地点から判断すると、本来は住居または溝に帰属する可能性が高いものばかりである。ここでは、包含層出土遺物として実測図を掲載する。

71は甕形土器。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。72～81は壺形土器。72～75は広口壺。72は口縁端部をわずかに拡張し、口縁端面に斜格子目文を施す。75は口縁部が下方



第31図 包含層 出土遺物実測図

に垂下し、口縁端面に櫛掻き波状文7条を施す。76は直口壺で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。外面にはナナメ方向の細かなハケメ調整を施す。77は複合口縁壺で、口縁端部は欠損する。78は広口壺の頸部片で丸みのある凸帯文を貼付けし、凸帯上及び凸帯下に貝殻施文による刻目を施す。内面には細かなヘラミガキ調整を施す。79は頸部に凸帯文を貼付け、凸帯上に斜格子目文を施す。80は肩部に棒状工具による刻目を施す。81は肩部に沈線文1条とヘラ状工具による刻目を施す。胴部外面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。82～84は鉢形土器。82は口縁部が外反し、口縁端面には凹線文2条を施す。胴部外面はタテ方向、内面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。83は直口口縁を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。84は脚付鉢の脚部片で、1.6cm大の円孔を4箇所に穿つ。85は高環形土器の脚部片で、径1.8cm大の円孔を2箇所看取する。外面はタテ方向のヘラミガキ、内面にはヨコ方向のハケメ調整を施す。86～88は甕形土器、89は壺形土器の底部である。86はわずかに上げ底、その他は平底となる。

4. まとめ

今回の調査では、主に弥生時代の遺構や遺物を確認することができた。SB1は一辺5m以上を測る方形住居と考えられ、住居内にはベッド状施設(地山削り出し)が付設されている。出土遺物より、住居の廃棄・埋没時期は弥生時代末と考えられる。また、ベッド及び住居床面からは、部分的に火山灰を含む土層が検出されており、これらは床面修復のための貼床土と推測される。このほかには、SB1構築以前に掘削された溝SD1がある。出土遺物等より、弥生時代後期後葉の溝と考えられる。調査地東側地域では弥生時代後期後葉から末に時期比定される堅穴住居や溝が数多く検出されており、調査で検出した住居や溝は、弥生時代後期集落の西方への広がりを予想させる貴重な資料である。また、調査では火山灰を含む土層を確認した。火山灰がブロック状に混入する状況は、調査地に隣接する東本遺跡4次調査の調査結果と同様であり、火山灰層の堆積状況や広がりを知る上でも重要な資料となる。稀少範囲での調査ではあったが、弥生時代後期集落の広がりや火山灰の検出など、大きな調査成果を得ることができた。特に、第Ⅵ層黒褐色粘質シルト上面での遺構の検出が、調査成果の要因のひとつであり、今後、周辺の調査における調査方法の指標を示したものとえよう。

遺構・遺物一覧 一凡例一

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
 (2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) II→II縁部、頸→頸部、肩→肩部、胴→胴部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウソモ、密→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表17 竪穴住居一覧

竪穴(SB)	地区	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
1	A1	楕円方形	(3.64)×(2.10)×0.40	黒褐色シルト 地	ベッド跡床	弥生・石	弥生時代末	SD1を切る

表18 溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A1~B1	凹状	8.30×0.98×0.16	南-北	黒色粘質シルト	弥生	弥生後期後葉	SB1に切られる
2	A2	凹状	1.72×0.58×0.16	南-北	黒色粘質シルト	弥生	弥生後期後葉	
3	A2~B2	凹状	2.30×0.42×0.06	南-北	黒色粘質シルト	弥生	弥生後期後葉	SP7に切られる

表19 土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B2・3	楕円形	逆台形状	(0.85)×(0.30)×0.20	黒色粘質シルト	弥生	弥生後期後葉	

表20 柱穴一覧

柱穴(SP)	地区	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	備考
1	A1	円形	0.36×0.33×0.14	オリーブ黒色シルト・ 黒色粘質シルト		
2	A1	不整形	0.74×0.70×0.12	オリーブ黒色シルト	土師	
3	A1	円形	0.36×0.33×0.12	オリーブ黒色シルト・ 黒色粘質シルト		
4	A2	(円形)	0.54×(0.23)×0.21	オリーブ黒色シルト・ 黒色粘質シルト		
5	A・B1	楕円形	0.48×0.38×0.19	オリーブ黒色シルト		
6	B1	楕円形	0.39×0.33×0.08	オリーブ黒色シルト		
7	B2	円形	0.23×0.22×0.22	オリーブ黒色シルト	弥生	SD3を切る
8	A2	(楕円形)	(0.40)×(0.16)×0.06	オリーブ黒色シルト		

表21 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
60	壺	口径(21.0) 残高 2.9	外反口縁。口縁上部は「コ」字状。小片。	ナデ	ナデ	茶褐色 乳褐色	石長(1~4)金 ◎		
61	壺	残高 4.4	「く」の字状口縁。口縁部欠損。胴部内面に施文あり。	ハク (5~7本/cm)	ハク(5~7本/cm) →ヨコナデ	乳褐色 茶褐色	石長(1~3)金 ◎	黒斑	15
62	壺	口径(15.8) 残高 1.5	口縁部面に凹線文2条。胴部に円孔(φ0.3cm)あり。	ヨコナデ	マメツ	褐色 褐色	長(1) ◎		15
63	壺	残高 22.3	長胴。1/4の残存。	タタキ	ハク(6~8本/cm) →ナデ	乳褐色 乳褐色	石長(1~5) ◎	煤付層	15
64	壺	口径(4.1) 残高 6.3	平底。	ハク→ミガキ	ナデ(ハクリ)	乳黄灰色 灰色	石長(1~4)金 ◎		
65	鉢	口径(16.2) 残高 9.7	直口口縁。口縁部は外縁。小さな平底。2/3の残存。	ハク (8~9本/cm)	◎ハク(8~9本/cm) ◎ハク→ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	石長(1~3)金 ◎	黒斑	15
66	鉢	口径(13.1) 残高 3.7	直口口縁。口縁部は「コ」字状。	タタキ	ハク(12本/cm)	黒色 黒色	石長(1~2) ◎	黒斑	
67	高坏	残高 7.5	坏部は接合は充焼技法。	ハク→ミガキ	◎ミガキ ◎ナデ	茶褐色 茶褐色	石長(1~2) ◎		15
68	高坏	残高 5.8	円孔(φ1.4cm)4方向に2段あり。	ハク→ミガキ	ナデ	褐色 褐色	石長(1) ◎		

表22 SD2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
69	鉢	残高 3.1	外反口縁。口縁部はナデ凹む。小片。	◎ヨコナデ ◎ミガキ	◎ヨコナデ ◎ミガキ	黒褐色 茶褐色	石長(1)金 ◎	黒斑	

表23 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
70	鉢	口径(18.6) 残高 3.0	外反口縁。口縁部は尖り気味。小片。	マメツ	ハク	黄褐色 黄褐色	石長(1~2)金 ◎		

表24 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
71	壺	口径(17.8) 残高 5.2	「く」の字状口縁。口縁部は「コ」字状。	ハク →ヨコナデ	マメツ	黄褐色 黄褐色	長(1)金 ◎		
72	壺	口径(22.5) 残高 4.0	広口唇。口縁部面に斜格子目文。	ハク→ヨコナデ	◎マメツ ◎ミガキ	褐色 褐色	長(1~2) ◎		15
73	壺	口径(13.0) 残高 4.2	広口唇。口縁部は下方に拡張し。口縁部面に凹線文2条。	ハク→ミガキ	マメツ	褐色 褐色	長(1~3) ◎		15
74	壺	口径(18.0) 残高 1.2	広口唇。口縁部面に凹線文2条。小片。	ハク	マメツ	褐色 褐色	石長(1)金 ◎	黒斑	
75	壺	口径(23.4) 残高 1.4	広口唇。口縁部は下方に垂下し。口縁部面に斜格子目文。	ナデ	マメツ	褐色 乳褐色	石長(1~2)金 ◎	黒斑	
76	壺	口径(8.2) 残高 4.9	直口唇。口縁部は「コ」字状。	ハク (10~11本/cm)	ナデ(工具類)	褐色 褐色	長(1~2)金 ◎		
77	壺	残高 2.6	複合口縁唇。口縁部は欠損。小片。	マメツ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石長(1~3)金 ◎		
78	壺	残高 9.5	貼付凸帯文1条。凸帯上及び凸帯下に負型施文による刻目。	ミガキ	ミガキ	褐色 暗褐色	石長(1~2)金 ◎		15
79	壺	残高 4.9	貼付凸帯文1条。凸帯上に斜格子目文。	ハク (7~8本/cm)	◎ハク(7~8本/cm) ◎ハク→ナデ	褐色 淡褐色	石長(1~2)金 ◎		
80	壺	残高 4.2	胴部に棒状工具による刻目。	ハク→ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	石長(1~4) ◎		15
81	壺	残高 6.7	胴部に線状工具と刻目。	ミガキ	ナデ(粥頭)	茶褐色 茶褐色	石長(1~4) ◎	煤付層	15
82	鉢	口径(14.8) 残高 5.5	外反口縁。口縁部面に凹線文2条。小片。	◎ヨコナデ ◎ミガキ	◎ヨコナデ ◎ミガキ	茶褐色 暗褐色	石長(1~4)金 ◎	黒斑	
83	鉢	口径(11.0) 残高 3.2	直口口縁。口縁部は「コ」字状。	ナデ	ナデ	茶褐色 黒褐色	石長(1)金 ◎	黒斑	
84	鉢	残高 2.7	貼付斜。胴部に円孔(φ1.6cm)4箇所。	ミガキ	ナデ	乳褐色 褐色	石長(1~2) ◎		
85	高坏	残高 3.4	柱部に円孔(φ1.8cm)2ヶ箇所。	ミガキ	ハク(8本/cm)	茶褐色 茶褐色	石長(1~2) ◎		

包舎層出土遺物観察表 土製品

(2)

品号	器種	法量(cm)	形態・施文	測 量		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
86	甕	底径 (4.6) 残高 2.4	わずかに上げ底。小片。	ハケ	ナデ	褐色 褐色	長(1~2) ◎	黒班	
87	甕	底径 (3.6) 残高 2.8	平底。	マメツ	ハケ(7本/cm)	褐色 黒色	長(1) ◎	黒班	
88	甕	底径 4.2 残高 3.1	平底。	ハケ	ナデ	黄褐色 灰褐色	石・長(1~4) ◎		
89	甕	底径 (3.8) 残高 2.6	平底。	板ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2)盃 ◎	黒班	

第4章

東野お茶屋台遺跡8次調査

第4章 東野お茶屋台遺跡8次調査

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

2007(平成19)年1月12日、松山市東野5丁目甲911-9地内において、住宅建設工事中に遺跡が発見されたとの届出が施工主である濱田俊三氏より松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)にあった。この報告を受け、愛媛県教育委員会は文化財保護法第96条1項に基づき、掘削を伴う施工範囲のすべてにおいて地下の埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れがあると判断した。また、それらの施工範囲は近接しているため、事前の発掘調査が必要と判断した。なお、調査対象地北側には松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地「No.79 お茶屋台古墳群」が隣接しており、包蔵地内には東野お茶屋台遺跡(1~7次調査)が所在し、既往の調査にて30基の古墳が発見されている。

これらの内容を受けて文化財課と施工主及び地権者(濱田ミチエ)は協議を行い、消失する遺跡に対して記録保存の為に発掘調査を実施することになった。調査は国庫補助事業として文化財課の指導のもと、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)が主体となり、2007(平成19)年2月15日より開始した。

(2) 調査の経緯

平成19年2月15日、調査区を設定後、調査区壁面の精査と遺構検出作業を行った。その結果、周溝状に巡る溝2条を検出した。2月16日、遺構検出状況写真を撮影し、2月19日、溝内にセクションベルトを設定し土層観察後、溝の掘り下げを開始した。溝内からは土師器片や須恵器片が少量出土した。その後、溝の測量や写真撮影をし、2月21日、調査壁の土層図や遺構平面図、コンタ図等を作成する。2月22日、完掘状況写真撮影後、発掘用具を撤収し屋外調査を終了した。

なお、今回の調査で検出した2条の溝は古墳に伴う周溝と考えられる。これまで、東野お茶屋台遺跡内で確認された古墳には「東野お茶屋台○号墳」といった古墳名が付けられており、今回検出した周溝をそれぞれ、「東野お茶屋台31号墳」、「東野お茶屋台32号墳」と呼称した。

(3) 調査組織

所在地：松山市東野5丁目甲911-9の一部

調査期間：2007(平成19)年2月15日~同年2月22日

調査面積：約38㎡

土地所有者：濱田 ミチエ

調査主体：松山市教育委員会、〔委託〕財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：松山市教育委員会文化財課 栗田 正芳

財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター調査担当 相原 秀仁

2. 層位

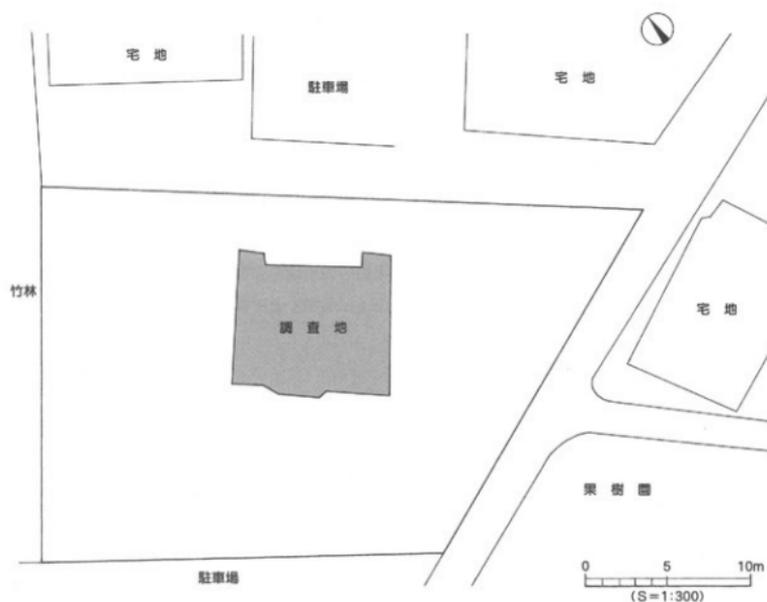
(1) 基本層位 (第34図)

調査地は芝が畔から延びる洪積台地上に立地し、標高57.9～58.4mに立地する。基盤層は、和泉砂岩礫を含む黄色を呈する粘質シルトである。調査地は、調査以前は果樹園として利用されていた。調査地の基本層位は、以下の5層である。

第Ⅰ層：暗オリーブ灰色 (5GY3/1) を呈する粘質土で、果樹園に伴う耕上である。層厚10～60cmを測る。現況は調査地北東部が最も高く標高58.4mを測り、漸次、南西部にむけて傾斜をなし、南西部では標高57.9mとなる。

第Ⅱ層：灰黄色 (2.5Y6/2) を呈する粘質土に黒褐色 (10YR3/1) 粘質シルトがブロック状に混入する土層で、調査地全域にみられる。本層は、調査地北東部から南西部にむけて傾斜堆積をなし、層厚10～48cmを測る。

第Ⅲ層：明黄褐色 (2.5Y7/6) を呈する粘質土で調査地ほぼ全域にみられ、層厚8～18cmを測る。調査で検出した層溝〔東野お茶屋台31号墳〕は、調査地の土層観察により第Ⅲ層上面から掘

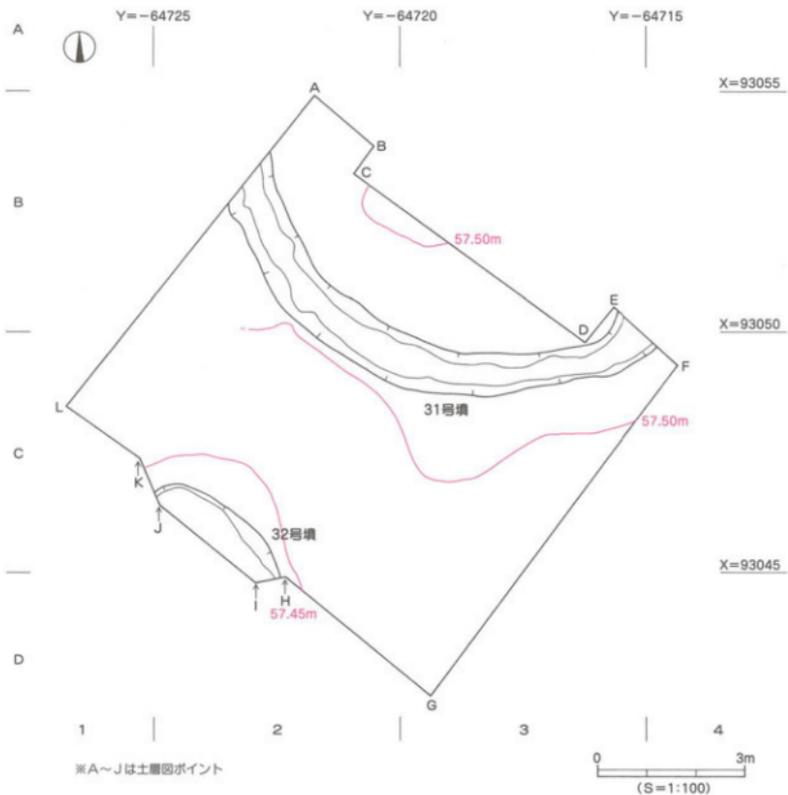


第32図 調査地位置図

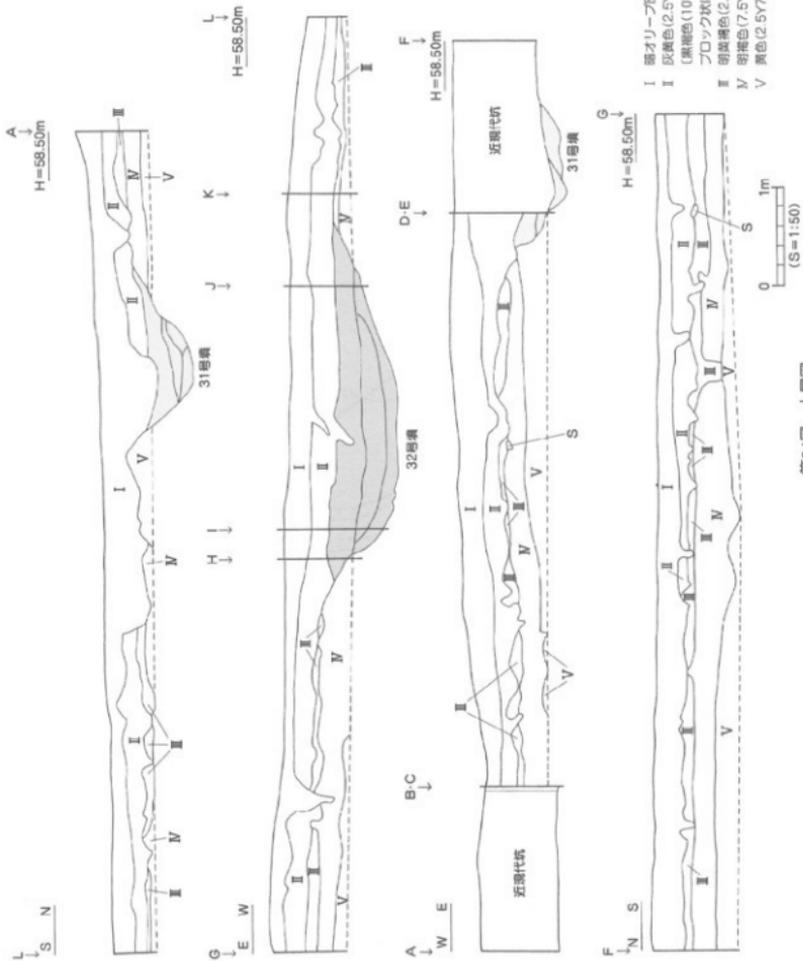
削されていることを確認した。なお、本層中からは弥生土器片や土師器片、須恵器片が少量出土した。

第IV層：明褐色（7.5YR5/6）を呈する粘性の強い土壌で、調査地全域にみられる。調査地東壁中央部付近が最も厚い堆積をなし層厚50cmを測り、調査地北東部では層厚20cm、南西部では層厚10cmを測る。本層中からは、遺物の出土はない。

第V層：黄色（2.5Y7/8）を呈する粘質シルト層で、調査地南西部を除く地域にみられる。層厚30cm以上を測る。本層上面の標高を測量すると調査地北東部が最も高く標高57.8m、西壁中央部付近が最も低く標高57.4mを測り、北東部から南西部に向けて傾斜をなす。なお、本層上面が調査における最終遺構検出面である。



第33図 遺構配置図



第34図 土層図

(2) 検出遺構・遺物 (第33図)

調査で検出した遺構は、古墳2基である。なお、主体部や墳丘は遺存しておらず、周溝のみの検出である。周溝は、第IV層及び第V層上面で検出した。

なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは北から南へ向けてA・B・C・D、西から東へ向けて1・2・3・4とし、A1・A2・・・D4といったグリット名を付した。なお、グリットは遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。

3. 遺構と遺物

調査では、古墳2基（東野お茶屋台31号墳・32号墳と呼称）を検出した。埋葬施設や墳丘は遺存しておらず、周溝のみの検出である。

(1) 古墳**東野お茶屋台31号墳 (第33・35図、図版17・18)**

調査地北半部B2～C4区に位置する。円形に巡る溝のうち、全体の1/3を検出した。溝は第V層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により第IV層上面より掘削されていることを確認した。本古墳は溝の形状より円墳と考えられ、規模は推定周溝外径8.6m、幅0.7～1.0mを測る。断面形態は「U」字状を呈しているが、溝外側壁体比内側壁体は緩やかに立ち上がる。溝埋土は四種類に分層され、上位より1層黒褐色(10YR3/1)粘質土、2層黒褐色(10YR3/1)粘質土に灰黄色(2.5Y6/2)粘質土がブロック状に混入、3層灰黄色(2.5Y6/2)粘質土、4層灰黄色(2.5Y7/2)粘質土である。深さは最深部で検出面下70cmを測るが、溝基底面は北側から南側に向けて緩傾斜をなす(比高差10cm)。なお、溝中央部付近には基底面が高くなる箇所がある。

遺物は主に2・3層中から土師器甕の口縁部片や胴部片、高坏の坏部片や脚部片、須恵器坏身片が散在して出土した。

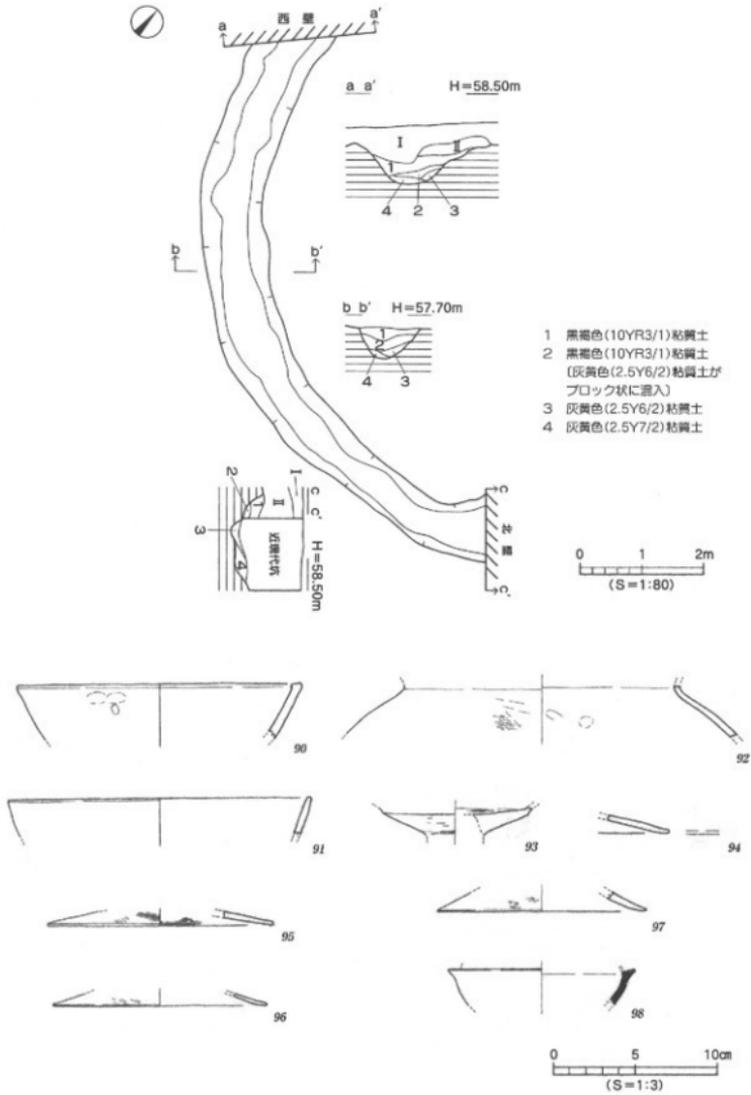
出土遺物 (第35図、図版19)

90～97は土師器である。90・91は甕の口縁部片で、90は口縁端部が内傾する面をもち、口縁端部は内方にやや肥厚する。91の口縁端部は先細りする。92は甕の肩部片で器壁は薄く、外面にハケメ調整を施す。93～97は高坏である。93は坏部片で、坏部下位に明瞭な稜をもつ。坏部内面にはヘラミガキを施す。94～97は脚部片である。94・95の裾部は直線的に開き、96・97は裾部がやや外反する。96・97の外面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。98は須恵器坏身片で、たちあがりは欠損しているが受部径11.4cmを測る。

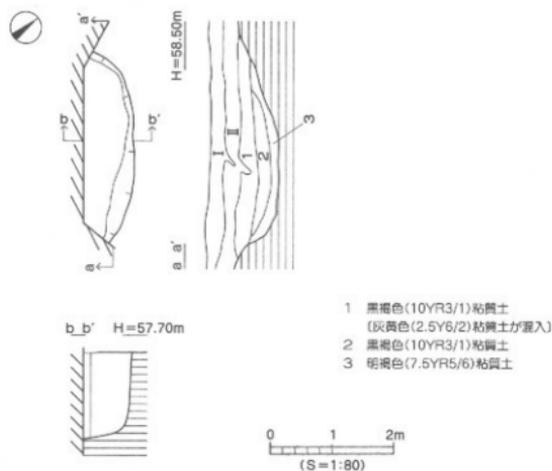
時期：出土した土師器や須恵器の特徴より、5世紀後半から末とする。

東野お茶屋台32号墳 (第33・36図、図版18)

調査地南西部C1～D2区に位置する。古墳に伴うと思われる周溝の一部を検出した。溝は第IV層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により第III層上面より掘削されていることを確認した。溝の形状は不明であり、墳形も方形か円形かは判断しえない。規模は検出長3.0m、検出最大幅0.8mを測る。断面形態は逆台形状を呈しており、深さは検出面下70cmを測る。埋土は三種類に分層され、上位より1層黒褐色(10YR3/1)粘質土に灰黄色(2.5Y6/2)粘質土が混入、2層黒褐色(10YR3/1)粘質



第35図 31号坑 測量図・出土遺物実測図



第36図 32号墳 測量図

土、3層明褐色(7.5YR5/6)粘質土である。

溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、31号墳の溝埋土と本古墳の溝埋土が類似することから、概ね31号墳と同時期の5世紀後半から末とする。

(2) 包含層・地点不明出土遺物

調査では第Ⅲ層掘削時に出土した遺物や、出土地点の不明な遺物がある。ここでは、実測可能な遺物を6点掲載した。

第Ⅲ層出土遺物 (第37図、図版19)

99～101は土師器の高坏である。99は坏部片で、坏部下位に明瞭な稜をもつ。100・101は脚柱部で、外面にヨコ方向のヘラミガキを施す。102は須恵器坏蓋片で、口縁端部は内傾する凹面をなす。

地点不明出土遺物 (第37図、図版19)

103は土師器の甕で頸部内面に明瞭な稜をもち、内外面共にハケメ調整を施す。104は土師器高坏で、外面にヘラミガキを施す。

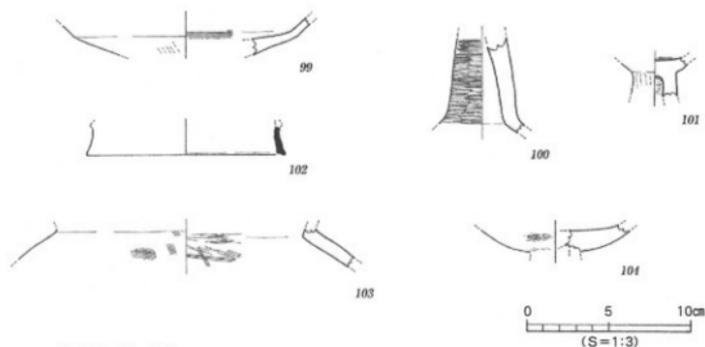


図 Ⅲ 層：99～102
地点不明：103・104

第37図 第Ⅲ層・地点不明 出土遺物実測図

4. まとめ

調査では、古墳時代中期後半から末に時期比定される古墳を確認した。東野お茶屋台31号墳は、周溝の形状より推定直径8.6mを測る円墳と考えられるが、埋葬施設や墳丘は未検出である。同32号墳は周溝の一部を検出したにすぎず、墳形や規模は不明であるが、お茶屋台古墳群の中に新たに2基の古墳が追加され、古墳群の広がりを知ることができたことは大きな成果である。

一方で、確認された古墳は周溝のみの検出であったため、墳丘規模や埋葬施設等、築造にあたる詳細なデータは残念ながら収集できなかった。今後は、既往の調査成果を整理・分析し、東野お茶屋台古墳群の実態解明と、それらを造営した集落の評価に努めなければならないと考えている。

遺構・遺物一覧 一凡例一

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表25 古墳(周溝)一覧

古墳	断面形	規模 (m) 長さ×幅×深さ	形状	埋土	出土遺物	時期	備考
31号墳	U字状	(8.6+α)×0.7~1.0×0.7	円形	黒褐色粘質土等	土師須恵	5世紀後半~末	
32号墳	逆台形状	(3.0+α)×(0.8+α)×0.7	不明	黒褐色粘質土等	—	5世紀後半~末	

表26 31号墳出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
90	壺	口徑(17.0) 残高 3.3	口縁縁部は内傾する面をもち、 内方に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	石長(1~2) ◎	柄汪旗	19
91	壺	口徑(18.1) 残高 2.2	外傾する口縁部。口縁縁部は尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石(1~2) ◎		19
92	壺	残高 3.2	胴部片。胴壁は薄い。	ハケ	ナデ	淡黄色 淡黄色	密・金 ◎		19
93	高坏	残高 1.7	坏部外面に明確な線をもち、	ヨコナデ 工具痕	ヨコナデ ミガキ	橙褐色 橙褐色	密 ◎	黒斑	19
94	高坏	残高 1.1	脚部部片。底部は垂直的にのびる。	ヨコナデ	ヨコナデ	明褐色 明褐色	石・長(1) ◎		
95	高坏	底径(13.6) 残高 0.8	脚部部片。底部は垂直的にのびる。	ハケ(8本/cm)	ハケ(6本/cm)	褐色 褐色	石・長(1~2) ◎		
96	高坏	底径(13.0) 残高 0.7	脚部部片。底部はやや反する。	ミガキ →ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	密 ◎		
97	高坏	底径(12.6) 残高 1.1	脚部部片。底部はやや反する。	ミガキ →ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	密 ◎		19
98	坏身	残高 2.2	たちあがりは欠損し、受部は上外 方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 灰色	密 ◎		19

表27 第三層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
99	高坏	残高 2.2	坏部外面に線をもち、	ヨコナデ ナデ→ハケ	ヨコナデ ハケ(10本/cm)	橙褐色 橙褐色	石長(1~4)金 ◎		19
100	高坏	残高 5.7	脚部部片。 脚部部は「ハ」の字状に開く。	ミガキ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石長(1~2)金 ◎		19
101	高坏	残高 2.4	脚部部片。	ミガキ	ナデ シボリ痕	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2) ◎		19
102	坏蓋	口徑(12.0) 残高 1.7	口縁縁部は内傾する凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	淡白灰色 淡白灰色	密 ◎		19

表28 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
103	壺	残高 2.3	胴部片。胴部内面に明確な線をもち、	ハケ	ハケ (6~7本/cm)	淡橙褐色 淡橙褐色	石長(1~3)金 ◎		19
104	高坏	残高 1.6	坏部片。	ミガキ	ナデ	淡茶褐色 淡橙褐色	石長(1~2)金 ◎		19

第5章 調査の成果と課題

今回調査した三遺跡からは、弥生時代から中世までの集落関連遺構と古墳の周溝を確認し、同時代における集落様相や古墳分布の一部が明らかになった。ここでは、時期別にまとめを行なう。

弥生時代

桑原高井遺跡3次調査検出のS B001は弥生時代末の円形竪穴住居で、住居東側に方形の張り部が付設されている。また、住居内には二重に巡る周壁溝が検出されたことから、S B001は改築が施された住居である。さらに、床面修復のための貼床が施され、その上面にて炭化材が出土したことから焼失住居の可能性もある。出土品には甕、甕、鉢、高坏、支脚などがあるが、線刻を施した土器片が2点ある。線刻は壺の肩部外面にあり、弧状や直線状の線が描かれているが、何を表現しているものかは分からない。このほかにも、包含層資料の中に、「×」や直線を描いた土器片が1点ずつある。

また、同遺跡からは平行に走る2条の溝(S D001・002)が検出されている。前述のS B001に先行する溝で、規模や埋土、方向性が酷似している。検出幅0.8~1.4m、深さ15~20cmを測り、溝内には砂や粘土ブロックが堆積しており水利に関するものと考えられるが、性格は断定し得ない。

東本遺跡8次調査からは、弥生時代末の方形竪穴住居S B1が検出されている。一辺3.6m以上を測る住居で、高床部(ベッド状遺構)を付設している。なお、住居床面付近には火山灰を含む貼床土が厚さ2~5cm程度に施されている。また、S B1に先行する溝S D1や土坑S K1が検出され、両者の時期は出土品より弥生時代後期後葉と考えられる。調査地を含む東本地区一帯には弥生時代後期後葉から末にかけての集落関連遺構や遺物が多数確認されており、今回の調査結果は、当地の集落構造や分布を解明するうえで貴重な補足資料といえよう。

また、両遺跡にて始良T n火山灰(AT火山灰)の堆積が確認されたことは、松山平野におけるAT火山灰の堆積分布を知るうえで重要な調査成果といえる。

古墳時代

東野お茶屋台遺跡8次調査では、古墳に伴う周溝2条を検出した。既往の調査成果より、各々を東野お茶屋台31号墳、32号墳と呼称した。両古墳共に墳丘は後世の削平を受けており遺存しておらず、埋葬施設は調査区外もしくは墳丘と同様、削平されている可能性がある。31号墳は推定直径8.6mを測る円墳と考えられ、周溝幅0.7~1.0mを測る。一方、32号墳は周溝の一部を検出したに過ぎず、墳形や規模等は不明である。なお、31号墳は出土遺物より5世紀後半から末の造営と考えられる。

中世

桑原高井遺跡3次調査からは、掘立柱建物と土坑を検出した。掘立101・102は1×1間規模の小型建物で、柱穴掘り方埋土は灰黄褐色砂質シルトを基調としている。柱穴内からは少量の土器器片が出土したが時期特定には至らず、周辺の調査事例をふまえ中世段階の建物と判断した。これらの資料は調査地や近隣地域に展開する中世集落の存在を示すものであり、桑原地区における中世集落の広がりや様相を解明するうえで貴重な資料である。

以上、時代別に調査成果を報告した。今回実施した三遺跡の調査により、桑原・東本地区における弥生時代から中世までの集落跡が広範囲に展開していることが改めて確認された。今後は古墳時代における集落と古墳の関連を分析・解明することが急務となろう。

写 真 图 版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90mm 他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm 他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28～85mm 他
フィルム	白 黒 ネオパンSS・アクロス		
	カラー アステシア100F		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマー S 240mm F5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレートIV RCペーパー

4. 製版 写真図版175線
印刷 オフセット印刷
用紙 マットコート 76.5kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～19 『報告書制作ガイド』

[大西朋子]



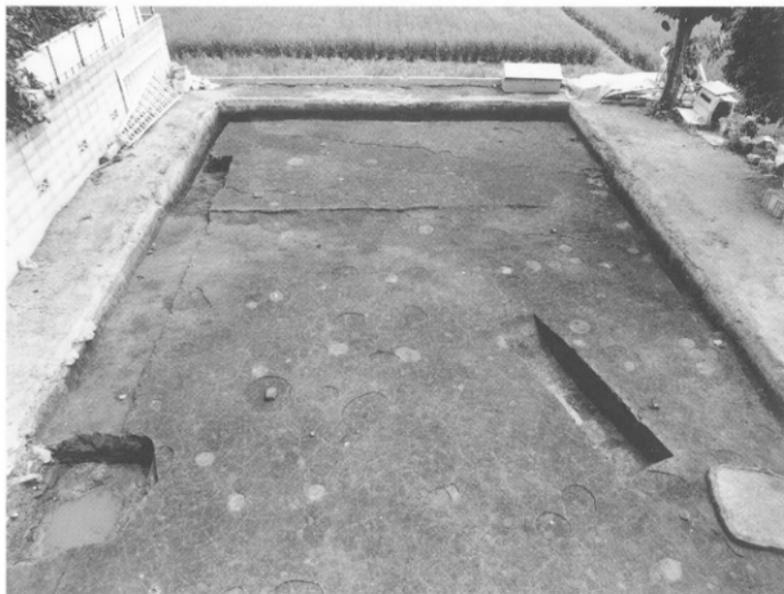
1 調査地全景 (東より)



2 表土掘削状況 (東より)



1 北壁土層（南より）



2 遺構検出状況（西より）



1 完掘状況（西より）



1 SB001検出状況 (東より)



2 SB001張出部検出状況 (東より)



1 S B001遺物出土状況 (南より)



2 S B001完掘状況 (南東より)



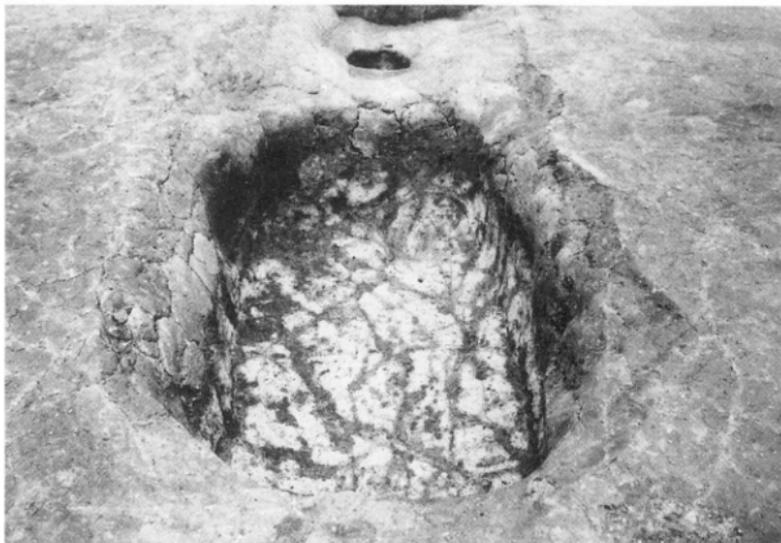
1 S D001断面 (南西より)



2 S D001・002完掘状況 (南西より)



1 SK001完掘状況 (南西より)



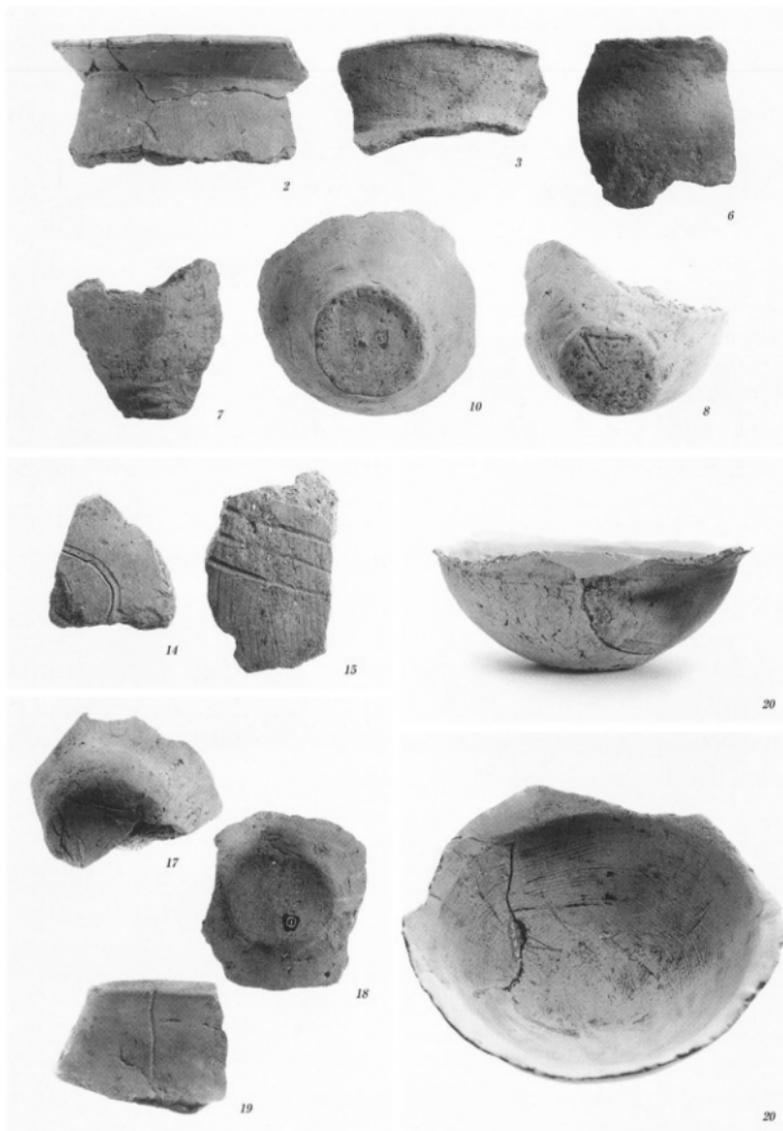
2 SK002完掘状況 (南西より)



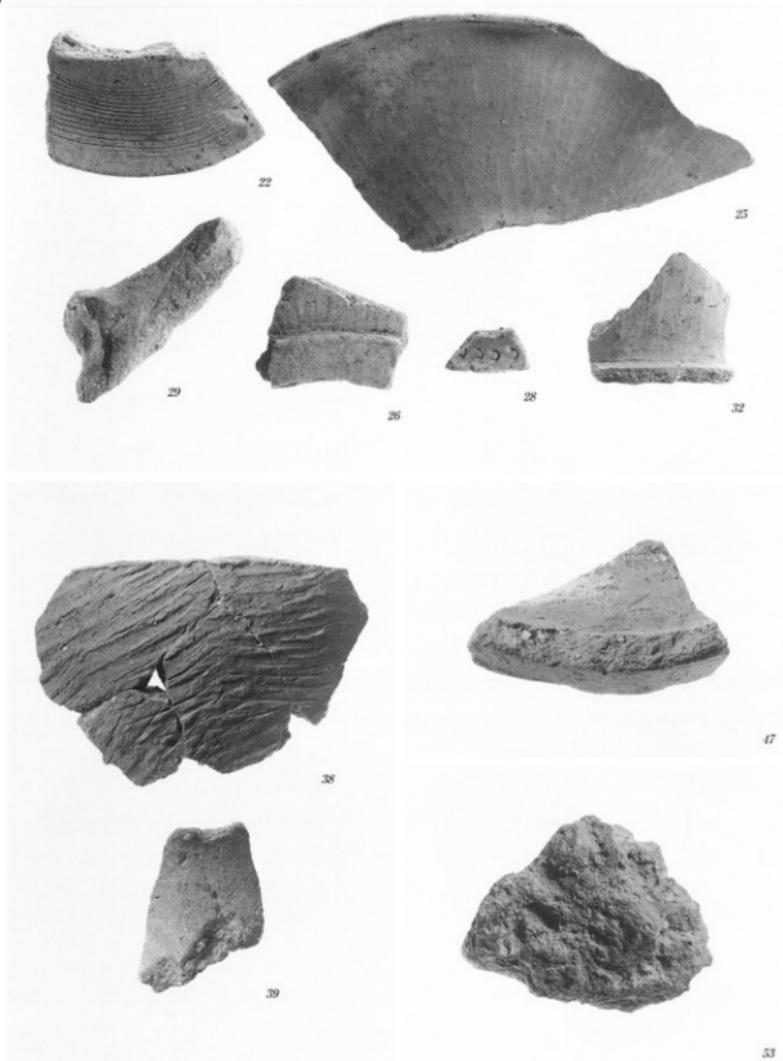
1 作業風景 (東より)



2 見学会風景 (北より)



1 SB001出土遺物(1)



1 出土遺物 (SB001(2) : 22・25・26・28・29・32、掘立001 : 38・39、柱穴 : 47 包含層 : 53)



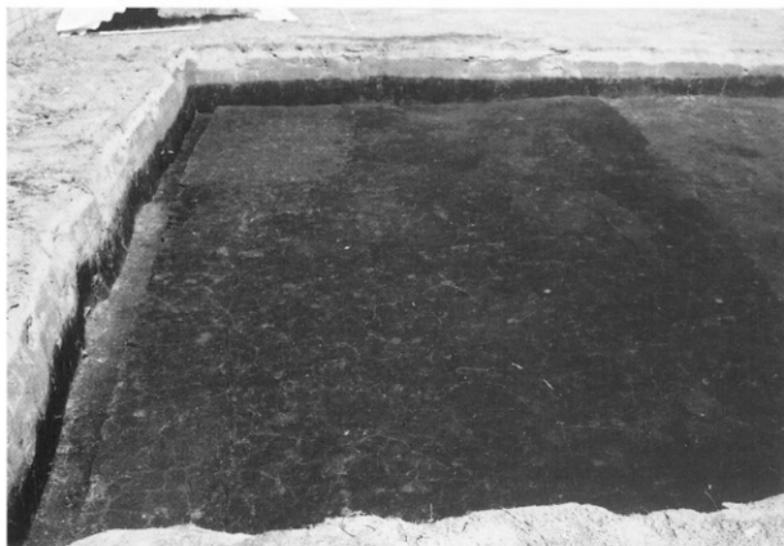
1 調査地全景（西より）



2 東壁土層（西より）



1 遺構検出状況(1)(南より)



2 遺構検出状況(2)(南より)



1 完掘状況（東より）



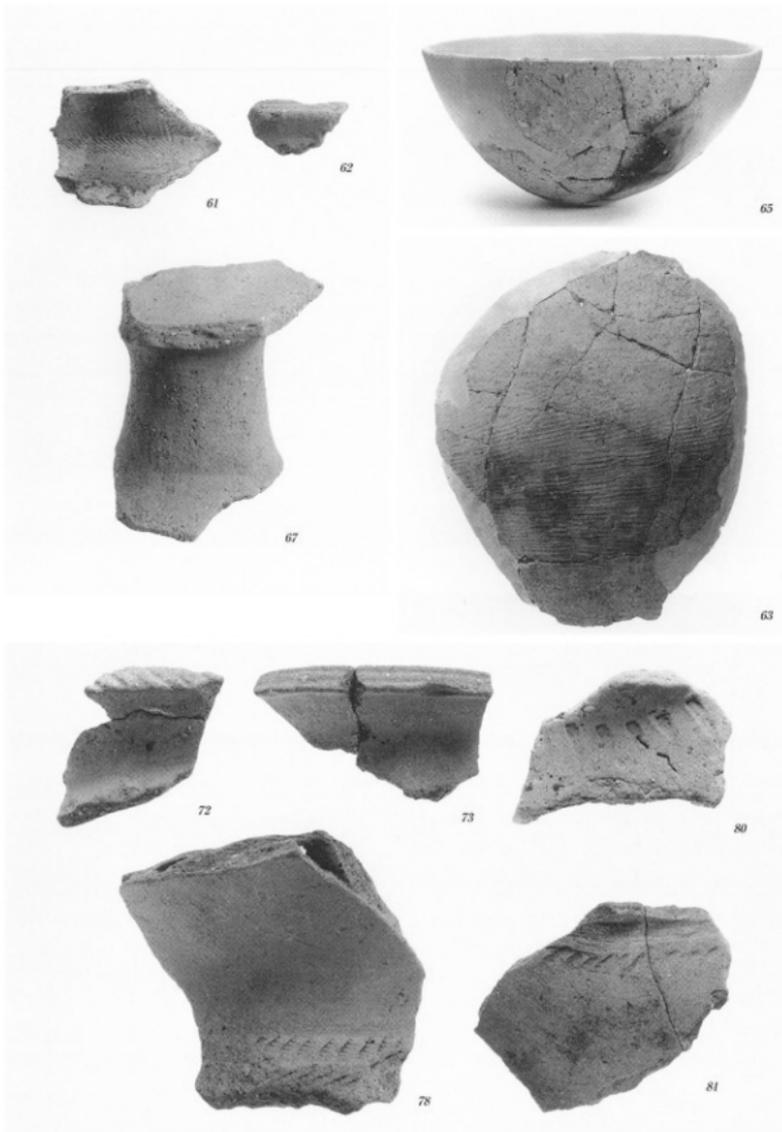
2 SB1 検出状況（北東より）



1 SD1検出状況（南より）



2 SD2・3検出状況（南より）



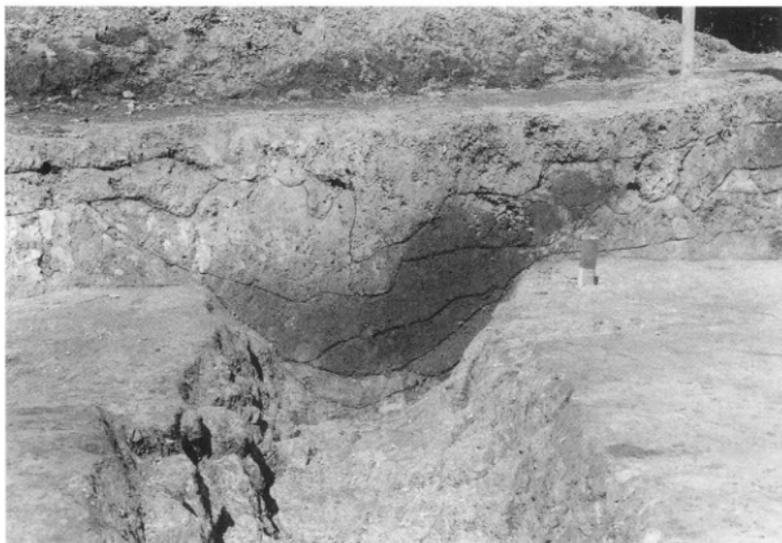
1 出土遺物 (S B 1 : 61~63・65・67、包含層 : 72・73・78・80・81)



1 調査地現況 (南より)



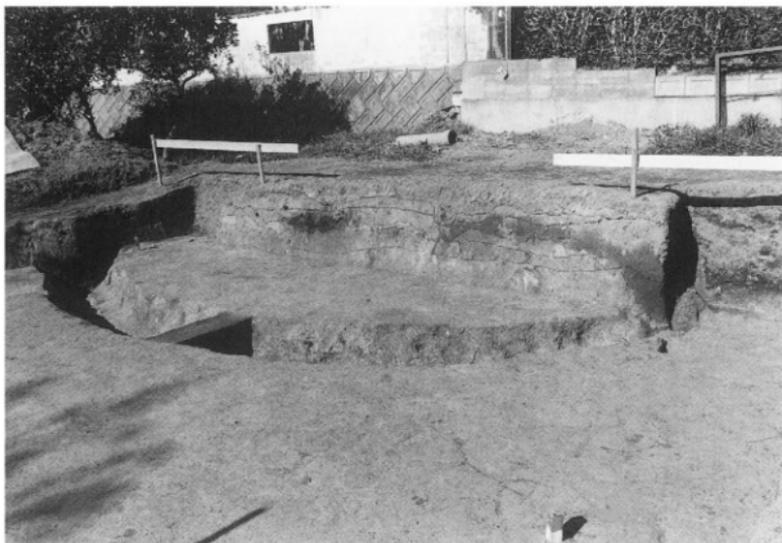
2 検出状況 (北西より)



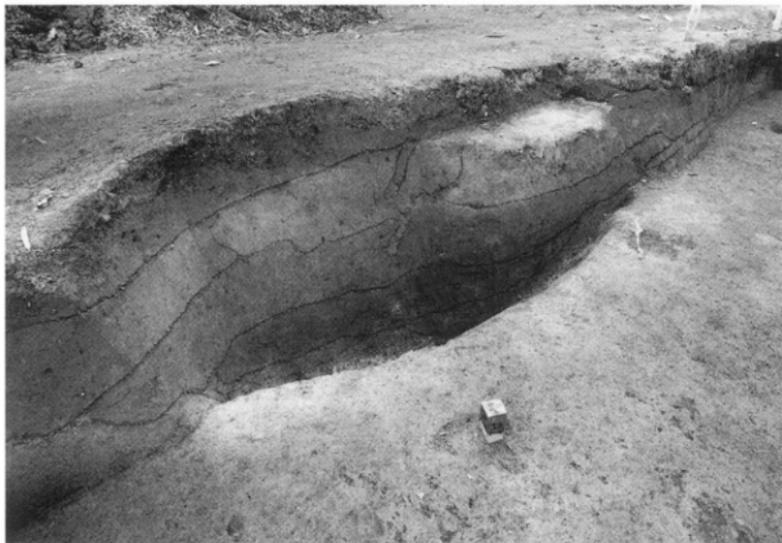
1 31号墳西壁土層（南東より）



2 31号墳ベルト断面（北西より）



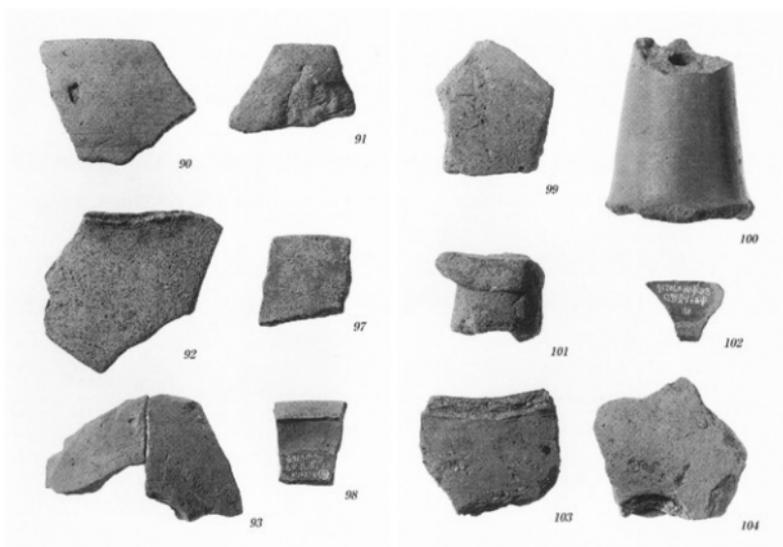
1 31号墳完掘状況（南より）



2 32号墳南壁土層（東より）



1 完掘状況 (北西より)



2 出土遺物 (31号墳: 90~93・97・98、第Ⅲ層: 99~102、地点不明: 103・104)

報告書抄録

ふりがな	くわばらたかいせき・つかもとせき・ひがしのおちやだいいせき							
書名	桑原高井遺跡3次調査・東本遺跡8次調査・東野お茶屋台遺跡8次調査							
副書名	国庫補助市内遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第138集							
編著者名	宮内慎一・相原秀仁・大西朋子							
編集機関	松山市教育委員会 財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター							
所在地	市教委：〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL (089) 948-6605 埋文：〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6 TEL (089) 923-6363							
発行年月日	西暦 2010年1月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
桑原高井3次	桑原1丁目 799番2	38201		33°49'49"	132°47'26"	20010712 } 20011005	241.04	個人住宅建設
東本8次	東本1丁目 116番6	38201		33°49'47"	132°47'24"	20061002 } 20061031	176.05	個人住宅建設
東野お茶屋台8次	東野5丁目甲 911-9の一部	38201		33°50'01"	132°48'11"	20070215 } 20070222	約38	宅地開発
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
桑原高井3次	集落	弥生時代 中世	竪穴住居・溝・土坑 掘立柱建物・土坑	弥生土器・石器 土師器		張出部を付設する弥生時代末の竪穴住居の検出		
東本8次	集落	弥生時代	竪穴住居・溝・土坑	弥生土器		AT火山灰の検出		
東野お茶屋台8次	古墳	古墳時代	周溝	土師器・須恵器				
要約	桑原高井遺跡3次調査では弥生時代後期後葉から末の竪穴住居や溝、土坑のほか、中世の建物や土坑等を検出した。また、東本遺跡8次調査においても弥生時代後期後葉～末の遺構を検出しており、桑原・東本地区における弥生時代や中世集落の広がりを知る貴重な資料が得られた。東野お茶屋台遺跡8次調査では2基の古墳が発見され、東野お茶屋台古墳群の中に新たな古墳が追加されることになった。							

松山市文化財調査報告書 第138集

桑原高井遺跡 3次調査
束本遺跡 8次調査
東野お茶屋台遺跡 8次調査

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

平成22年1月31日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790-0003 松山市三番町6丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

印刷 株式会社 明朗社
〒791-2112 伊予郡砥部町重光150番地1
TEL (089) 958-6868

